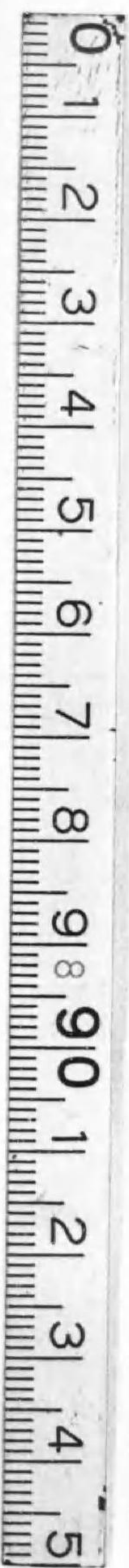


352  
990



始



特 219  
476



皇國史研究會編

趣味の國史物語 (建國篇)

東京學友社發行



## 序

松の木の緑に映る日本。

櫻の花の朝日に匂ふ日本。

東海の高く聳ゆる芙蓉の大峯の如く、三千年の光輝ある國史を擁して、亞細亞の盟主と仰がれる祖國日本。

そこに生れた私たち日本人は、なんと幸福なことでせう。昔の詩人は「み民われ生けるしるしあり」と歌つて、聖の御代に生れ合せた幸福を楽しみました。それにも増して文化の進んだ今の日本に生を受けた私たちは、何と歌つて此の歡びを表しませう。上に御英邁なる聖天子を戴き、下には八千萬の同胞が相睦みて一意國運の發展を圖る。かうした理想的な國家が、又と世界にありませうか。

私たちは、徒に他國を侮つて、お國自慢をするものではありません。が、世界のどこを眺めても、我が日本のやうな美しい國家は無いのです。日本の風光を慕つて遙々海を渡つて來る多くの外國人たちは、フジヤマ（富士山）を仰ぎサクラの花を眺めて、日本でだけ見られる美しさを嘆稱する外に、その風光にも増して一層美しく偉大な日本の國柄に驚嘆して歸るのです。「羨しいのはお國の國體です」と言つて、言葉に出して嗟嘆して行くものが數多くあるのであります。これは決して一片のお世辭ではなく、本當の事を、正しくいつてゐる言葉です。

しかし、世の中には、決して正しい事を正直に考へる人許りが居りません。それどころか、他人の立派な事と云へば何も彼も之を惡様に罵り、之を打壞さうとする者のある世の中です。近い話が、壽府の國際聯盟などが其の好い例ではありませんか。あれほど無茶な支那のやり方が分らないで、却つて正義の爲めに戦ふ皇軍の行動を非難してゐるのです。否、分らないのではありますまい。分つてゐても、自分

々々の利益の爲めに、わざと尤もらしい口をきくのでせう。併し、それよりも更に口惜しいのは、さうした連中が如何にも上手に持掛ける口車に乗せられて、自分で自分を疑出すやうな愚か者が、近ごろ日本人の中にさへ時折り出て來ることで、これは何といふ嘆かましいこととせう。

神風の吹く日本。

天佑の豊かな日本。

私は、さうした世にも不心得な人たちに、力強く「わが皇室を仰ぎ見よ」と云つてあげたいのです。國を肇むること宏遠に徳を樹つることの深厚であらせられた我が皇室は、未來永劫天壤と俱に繁榮され、それが同時に我が國運の發展となることは、昔の聖天子が「民の富めるは、朕の富めるなり」と仰せられたお言葉に依つても明かです。皇室中心主義！これが我日本の發展して行く原理であり、國體の精華の淵源であることは、今さら私の申す迄もないところです。

私は、我日本の國民に、一人でも半分でも前に擧げたやうな不心得者が無くなつて、三千年來我々の祖先のして來たやうな忠良さに一致協力して、天壤無窮の皇運を扶翼し、さうして永遠に輝く我が國體を中外に發揚したいと念じて止みません。私が此の本を書かうとした動機は、全くこの念願の外に何物もなかつたのでありません。何卒、私は、私たちの愛する日本の、永への隆昌の爲めに、昔に變らぬ皇室尊崇の美風を愈々強いものにし、輝く皇室の繁榮と俱に拓け行く祖國の發展を歡ばうではありませんか。

此の本の仕組は「皇室美談」として三卷から成つてゐます。本卷は先づ建國の次第に筆を染めて「建國の卷」としましたが、續いて「御聖徳の卷」「御坤徳の卷」を記して、天地の間に二つとない我が皇室の尊さ有難さを物語らうとします。本卷の内容は、主として「古事記」に依つて執筆し、「日本書紀」「古語拾遺」等によつ

## 目次

一、高天原	一
肇國宏遠(一)……天神五代(三)……神世七代(四)……國土成生(四)……神々の誕生(九)……黃泉比良坂(一二)……三神出現(一二)	
二、天の岩戸	二七
須佐之男命(二七)……岩戸がくれ(三五)……大神の再現(三八)	
三、大蛇たいぢ	四三
逐はれた須佐之男命(四三)……一本の簀が？(四五)……おろち退治(四九)……出雲八重垣(五八)	
四、因幡の白菟	六一
出雲の神々(六一)……大國主神(六一)……稻羽の白菟(六三)	
五、赤い猪・ほらほら鼠	七一

毛間山の赤猪(七二)……貝のお使(七四)……迫害に追はれて(七六)……根の堅洲國(七九)……内  
はほらほら(八三)……椋の實と赤土の塊(八六)……根の國を後にして(八八)……大國主の神の再  
現(九一)……山田の案山子(九一)

六、國ゆづりの巻……………九八

天の浮橋(九八)……安の河原の神集へ(九九)……再度のお使ひ(一〇一)……出雲平定(一一〇)……  
…出雲大社(一一八)……大社詣て(一一九)

七、高千穂の峯……………一二三

天孫降臨(一二三)……建國の大詔(一二五)……高千穂の宮に(一三〇)……物言はぬ海鼠(一三三)

八、伊勢の宮居……………一三五

かたじけなさに(一三五)……三種の神器(一三五)……倭の笠縫邑へ(一三七)……伊勢の内宮(一  
三八)……伊勢の外宮(一四一)……お伊勢まゐり(一四五)……劍の熱田神宮(一四七)

九、海の幸・山の幸……………一五一

或日の笠沙の御前(一五一)……木花咲耶姫(一五三)……海の幸・山の幸(一五六)……井戸水に映  
る貴い影(一六七)……三年目の或る夜(一七二)……鹽みつ珠と鹽ひる珠(一七六)……おぼちす  
ち(一八三)

一〇、東を指して……………一九〇

鶉がや葺きあえぬに(一九〇)……海の國のたより(一九五)……神代の東雲(一九六)……部を東に  
もとめて(一九八)

一一、鳥のゆくへ……………二〇一

日向をあとに(二〇一)……宇沙から岡田の宮へ(二〇四)……多祈宮から高島の宮へ(二〇六)……  
浪速の津から一路倭へ(二〇七)……長髓彦と饒速日命(二〇九)……日を避けて熊野へ(二一一)……  
…熊も驅る熊野の山々(二一五)……八咫鳥に導かれて(二二一)……宇陀の高城に鳴なは張りて  
(二二三)

一二、大和建國……………二二九

金鷄のかゞやき(二二九)……金鷄勸章のいはれ(二三四)……大和平定(二三五)……大和建國  
(二三七)

# 趣味の國史物語

(建國篇)

## 一、高天が原

皇國  
宏遠

われ等の明治大帝さまは、教育にかゝはる御勅語の劈頭に、「わが皇祖  
皇宗國を肇むること宏遠に」と仰せられました。私たちは、先づ此の

深遠な大詔から考へてまゐりませう。

天は限りなく高く、時は悠久に長い。私たちの日本はその宇宙の一方に、美しい  
國懐かしの郷として、長い年月、我々の祖先が住み馴れた樂土です。櫻の花の  
咲く日本、芙蓉の峯の聳ゆる日本。さうして、萬世一系の帝室を戴いて仕合せな月

日を送つて行くことの出来る國と國民とが、又と此の世に二つありませうか。或る外國人が申しました。「本當に日本の國は美しい。お情深い天子様と、忠義の心に充ち満ちた國民とで造り上げた御國は、國家といふよりか一軒のお家と云つた方がよろしい」と。さうして、自分から此のお家の一人となつてしまつた外國人も數多くありました。お家！ 全くその通りです。大正天皇さまのお勅語には、「義は君臣、情は父子」と仰せられてゐます。日本の天子様と國民とは、その心もちは全く父と子です。有り難く、尊い、上御一人の天子様は、八千萬の國民が畏くも自分々々のお父様として仰ぎ、また天子様は我々國民を、同じやうに御自身の赤子として戀はせられて居られます。勿體ないばかりに嬉しいことではありませんか。さて、かうした有り難い私たちの日本國は、いつ頃から、どうして建てられたものでせう。これは、お互にしつかり知つておかなくてはならない大切なことです。

日本の國の歴史は長いと申しました。神武天皇さまがわが中洲を平定されて、初

めて高御座におつき遊ばされてからでさへ、二千六百年に近い歳月を經てゐるので、日本の歴史はそれ以前にも茫漠として遠いのです。それは、いつといつて數へることの出来ないほど遠い昔で、天と地とが分れて、初めて此の世の出来た時から始まつてゐるのです。

### 天神

その天と地の始めの時に、高天原に第一に現はれた神様を天之御中主

### 五代

神と申されました。その次に高御産巢日神、その次に神産巢日神が

現はれました。この三柱の神様を造化の三神と申します。まだその頃は、國が出来たばかりで、浮いた脂か水母のやうにふわ／＼と漂うてをりました。そこへ、柔かい土を破つて吹出す葦の芽のやうに萌え出た神様が宇麻志阿斯訶備比古遲神、ついで天之常立神が現はれました。造化の三神に此の二柱の神様を加へた五柱の神を別天神と申します。



神世 次いで現はれた神様が國之常立神、次ぎが豊雲野神と申します。これ

七代 までの神々はいづれも獨身の神々でしたが、それからは女神と男神とが二柱づゝ十柱（五代）お生れ遊ばされました。初めが宇比地邇神と須比智邇神、次ぎが角杵神と活杵神、それから意富斗能地神と大斗乃辨神、ついでて游母陀琉神と阿夜訶志古泥神、それから伊邪那岐神と伊邪那美神でした。

國常立神から二柱、次ぎは男神と女神の二柱を一代と數へて七代の神々を、神世七代と申します。

國土 天つ神々は、或る時、伊邪那岐神と伊邪那美神をお召しになり、成生 「あの水母のやうにふわ／＼してゐるものを固めて、一つの國土をおつくりなさるやうに」

と仰せられました。さうして、美しい天の沼矛といふ矛を下さいました。



ふ給せら作を土國……神柱二

二柱の神様は、

「いかにも、國土をつくりませう」

とお返事なされて、大空の高くに弓なりにかゝつてゐる天浮橋の上にお出ましになりました。そこから天の沼矛をさし下して、ふわ〜と漂つてゐる鹽のおもてを、こをろこをろと攪きまわして引き上げなさいました。その時、矛のさきから滴り落ちた鹽が固まつて、一つの島が出来ました。これを游能基呂島と申しました。

二柱の神様は、それから、よろこんで游能基呂島にお下りになりました。そこへ天之御柱といふ大きな〜御柱を立て、八尋殿といふ立派な〜御殿をお立てなさいました。それから、二柱の神様はたくさん島の島々を生み、たくさん神々をお生みなさいました。

初めに生れたのは水蛭子と申されました。が、このお子さんは、三年たつても歩むことの出来ないものでしたから、二柱の神さまは、葦の葉の小舟にのせて流して

しまひました。次ぎにお生れなされたのは淡島でしたが、これもお子様の數には入りません。

それから、次ぎ〜にたくさんのお子様をお生みなさいました。その名を記して見ませうならば、

先づ、淡道の穂の狭別の島。

次が伊豫の二名の島。この島は一つの島で四つのお顔がありました。

伊豫の國を愛媛、

讃岐の國を飯依比古、

粟の國を大宜都比賣、

土佐の國を建依別と申しました。

次に、隱岐の三子の島。

次に、筑紫の島。この島も身が一つでお面が四つありました。

筑紫の國は白日別、

豊の國は豊日別、

肥の國を建日向日豊久土比泥別、

熊曾の國を建日別と申しました。

次に、伊伎の島を生み、

次に、津島、

次に、佐渡、

次に、大倭豊秋津島をお生みになりました。

これまでの八つの島々を、大八島國と申します。

大八島國をお生みなされた後に、二柱の神様は更に吉備の兒島を生み、小豆島を生み、大島を生み、女島を生み、知訶島、兩兒の島をお生みなさいました。

神々の誕生  
~~~~~  
たくさんの島々をお生みなされた二柱の神様は、そのあとで又たくさんの神々をお生みなさいました。その神々のお名前も申して見ませう

なら、

先づ、大事忍男の神。

次に、石土毘古の神。これは石や土の神様です。

次に、石巢比賣の神。砂の神様です。

次に、大戸日別の神。戸の神様です。

次が、天之吹男神と大屋毘古神。屋根の神様です。

次が、風木津別之忍男の神で、家の神様です。

次が、海の神様で、大綿津見の神。

次は、水戸の神様で、速秋津日子の神と速秋津比賣の神。この神様はやがて河と海とおわかれになつて、先づ沫那藝の神と沫那美の神をお生みなされました。

次には、頰那藝の神と頰那美の神。

次に、天之水分の神と國之水分の神。

次が、天之久比奢母智の神と國之久比奢母智の神。

次に、風の神様である志那都比古の神。

次が、木の神様である久久能智の神。

次が、大山津見の神で、山の神様。

次が、鹿屋野比賣の神とも野椎の神とも申しまして、野の神様でした。此の神は

大山津見の神とそれぞれ野と山とにお別れになつて、天之狹土の神と國之狹土の神

とをお生みになられました。

次には、天之狹霧の神と國之狹霧の神。

その次に、天之闇戸の神と國之闇戸の神。

その次が、大戸惑子の神と大戸惑女の神。

それから船の神の鳥之石楠船の神。も一つの名は天の鳥船の神とも申しました。

それから食物の神様である大宜都比賣の神。

おしまひに火之夜藝速男の神。この神様は火の神様で、或は火之炫毘古の神とも

申されましたが、この爲めに悲しいことが起りました。それは、火の神をお生みな

されましたので、女神が大火傷をなさいました。それが因になつて、たうとうおな

くなりになられたのでした。

男神は大そう悲しまれました。果敢なくなつた女神様の枕邊に泣き倒れ、その足

もとに腹ばひたふれて、

「おゝ、いとしい私の妻よ。子供ゆゑに、貴い生命を無くしましたのか。まだお

前と一緒にするはずの仕事はたくさんあつたのに……」

と云つて泣きくづれました。男神さまの、此の世もあられず泣き叫ばれるお聲は、

山をも谷をもゆり動かし、そのおん眼から溢れる涙——その玉から泣澤女といふ神

様が生まれました。が、致し方がありませんので、一と先づ男神は、女神の屍を、出雲の國と伯耆の國の境にある比婆の山べに葬りました。

そのおともらひから歸られた男神は、ひごくお怒りになつて、十拳の劔をぬいて火の神をお斬りになりました。その時、劔の尖や柄などについた血が固まつて、たくさんの神様になりました。

黄泉比

伊邪那岐神は、それでも女神のことが忘れられません。何とかして、

良坂

今一度、伊邪那美神にお逢ひしたいと思ひつめました。それで、

「よし、黄泉の國まで行つて見よう」と考へました。

それから、男神は女神のあとを慕うて、はるく遠い黄泉の國へと辿りつきました。女神はすぐそれとお氣づきになりました。そこで、岩の扉をあけてお身體を半

分ほどお出しして、男神さまをお迎へになりました。それを見ると、男神はもう嬉しくてく堪りません。息をはづませながら、

「お、いとしい妻よ。逢ひたかつた。私には、まだお前と一緒になすべき仕事がいくらも残つてゐる。どうか今一度、私の國に戻つて、力を添へてくれよ」と仰有いました。

女神はその言葉をきいてゐる中に、だんく頭をさげ、打萎れてをりましたが、やがて頭をあげて、

「忝い——ことごとございます。それ程まで、私をお力に思召して下さることは誠にありがたいことでございます。けれども残念でした。今少しお早くいらつしやつて頂くとよかつたのですが、私はもう黄泉國の穢れた食物をたべてしまひました。私の身體は、二度と再び明るい國に出ることが出来なくなつてしまつたのです。……しかし、折角いとしいあなたがお迎へにお出で下さいましたのですから

ようく黄泉の神にお話して、もう一度明るい國にお伴いたしませう。その間、暫らくお待ち下さいませ。それから、せひ一つお約束しておきたいことは、どんなことがありましても、その間には、決して私の姿をごらんなさねやうにして下さい。宜しうございますか」

と女神が念をおしました。

「宜しい。早く行つてお話をしなさい」

と男神が承知しましたので、女神も喜んで、

「それでは暫らくお待ち下さい」

といつて、御殿の奥深く入つて行かれました。

伊邪那岐神は、女神がた易く承知してくれましたので、大そう喜びました。多分黄泉の神も女神の願ひを許してくれるであらう、さうしたら、再び昔のやうな楽しい月日を迎へて、もつとく旺な國造りが出来ようと思ふと、こみ上げる嬉さにそ

の嚴めしいお顔が崩れるのでした。

けれども、どうしたのか女神はなか／＼出て來られませんか。男神の心はだん／＼いら立つてまゐりました。

「どうしたのであらう。黄泉の神が許さないのだらうか。よもや、女神の心が變つたのではあるまいが……」

と、いろ／＼のことを考へながらも待つてゐましたが、いつまで待つても女神の姿は見えません。

男神は待遠しくて／＼なくなりました。で、女神と約束したことも何も忘れてしまひ、とにかく、女神が今なにをしてゐるかを知らうとし、闇い御殿の中に入りました。

男神はご自分の左の鬢にさしてゐられた櫛を抜き、その片方の端の太い齒を一枚ぼつきり折つて、それに小さい灯をともしました。その灯は魔法の蠟燭みたやうに

ぼつかり青い焰を浮かせて深い闇を照しました。そのかぼそい光をたよりに、男神は奥へ／＼と入つて行かれました。

御殿はおそろしく広い上に、かぎりなく静かでした。男神様は、ばつと丸く照る青い灯をたよりにして、一つ／＼と部屋々々を探してまはりました。する中に、一ばん奥まつた部屋のまん中で、一つの怪しい屍を見つけました。その屍は、見るかげもなく壊れてゐて、青くふくれた身體からは、膿がとろ／＼と流れ、たくさんのお虫がわいてゐました。そればかりか、その頭には大雷がをり、胸には火の雷、腹には黒雷がゐりました。股には拆雷がをり、右手に土雷左手に若雷、左足に鳴雷右足には伏雷、合せて八つの雷がをるではありませんか。男神はそれを見て、身の毛もよだつやうに驚きましたが、その次ぎには、まったく腰のぬけるばかりにおどろきました。男神がよく／＼見ますと、その屍が、いとしい女神さまであつたではありませんか。「あッ」といつて危く倒れさうになつた男神さまは、物をもいはず其

のまゝ立つて、どん／＼と逃出してしまひました。

それをおさとりになられた女神さまは、大そうお怒りになりました。

「あなたは、あなたは何といふお方です。あれほど固くお約束をなされたのに、どうして私にこんな耻をかゝせるのです」

といつて、豫母都志許賣たち（醜い女の顔を  
した悪い鬼）を呼びあつめて、男神のあとを追ひかけました。

伊邪那岐神は、どん／＼と逃げました。けれども、歩き馴れない黄泉の國の道ですから、とかく思ふやうには進めません。それなのに、後から追ひすがる女の悪鬼どもは、恐ろしいはやさで追ひついてまゐりました。男神は驚きましたが、つと思ひついて、お髪飾りの葛の蔓をとつて、追つて來た悪鬼めがけて投げつけました。すると、不思議やその蔓が地に落ると一緒にふさ／＼した見事な葡萄の實に變りました。それを見た悪鬼どもは、あらずつてその葡萄にたかり、おいしさうにむしや

むしや食べかゝりました。男神は此の隙だとばかり一生懸命お逃げになりました。けれども、それも暫らくの間でした。

まもなく葡萄の實を喰ひつくした悪鬼共は、何ごとやら怪しいことを叫びながら、スグまた男神に追ひついてまゐりました。そこで、男神は今度は右の御髻にさゝれた湯津爪櫛といふ大きな櫛を引抜いて、その齒を折つては一つ一つと投げつけました。すると、その齒の一つ一つが皆んなきれいな筈になつて生え出しました。追ひすがつた鬼どもは、それを見ると、又また筈に飛びついて、むしやくと喰へはじめました。

かうしておいて、男神はごんご逃げ伸びました。あと暫らくで黄泉の國境へ出られる所までまゐりましたから、やうやく安心した男神は、背後をふり返つて見て驚きました！ その時には、さきほど女神のお身體に潜んでゐた八つの雷神が、千も二千もの大軍を引連れて、スグそこまで追ひかけて來て居るではありませんか。



一、高天が原

男神……黄泉の鬼共の桃を  
靈氣を以て拂はせ給ふ



男神はびつくりして腰にしてゐられた十拳の劔を抜き放ち、それを後手にふりながら、黄泉の軍を防ぎふせぎ、漸くのことゝ黄泉比良坂の下までまゐりました。

黄泉比良坂は此の世と黄泉の國境にある坂で、そこには一本の大きな桃の樹があつて、梢まで、枝もたわむばかりに實がなつてをりました。

男神は、手早く其の實を三つまで掻ぎとり、そこで、靜に黄泉の軍勢を待つてゐました。

鬼や雷の大軍は、間もなくどや／＼と追ひついてまゐりました。男神は彼等をしつかり手許に引きつけておいて、手に持つてゐた桃の實を力一ぱい、一オつ、ニアつ、三つと投げつけました。鬼どもは、それを受けると弾かれるやうに仰天しました。桃の靈氣に撲たれたのです。三つの桃で、一軍は散り／＼ばら／＼に逃げもどつてしまひました。

男神は、これでやつと安心しました。そこで、桃の樹に向つて、ていねいにお禮

を申しました。

「あゝ桃よ、有りがたいことであつた。お前があつたばかりに私も助かつた。どうかお前が今私を助けてくれたやうに、葦原の中つ國（日本）にある人たちの苦しみを、助けてあげてくれよ」

と仰有いました。さうして、桃には意富加牟豆美命といふお名をくださいました。ですから今日に至るまで、桃はあたり前の樹ではありません。

さうかうしてゐるところへ、今度は女神が御自分で追ひかけてまゐりました。それを見ると、男神は、傍にあつた千引岩を抱え出して坂の真中に据ゑ、黄泉からの路をきつぱり塞いでおしまひになりました。

女神は岩の彼方までまゐりましたが、そこからは進めなくなつてしまひました。しかたなく、そこへお立ちなされた女神さまは、恨めしさうに男神さまに仰有るのでした。

「まあ何といふ情ないことをなさいませ。あなたがこんな事をなさいませなら、宜しうございます、これから私はあなたの國の人を、毎日々々千人づゝとり殺してしまひますから」

と仰有いました。すると、男神は聲をかけて、

「おゝいとしい妻よ。お前がそんなことをされるなら、私は毎日千五百人づゝの子供たちを生んでみせよう」

と仰有いました。さうして、そのまゝお別れになりました。それから、わが葦原の中つ國では、毎日千人の人が死んで、千五百人づゝの子が生れるやうになりました。この黄泉比良坂といふ坂は、今の出雲の國、伊賦夜坂のことだと云ひ傳へられてゐます。

三 神 黄泉の國からおかへりになられました伊邪那岐神は、  
出現 「あゝ、何といふ私は穢らはしい國へ行つたことであらう。これから

禊をして、このけがれを落さなくてはなるまい」

と仰有つて、筑紫の國の日向の橘小門の阿波岐原といふ野にお出ましになつて、そこを流れる川水で禊ぎ祓ひをせられました。

そのとき、先づ川邊に立たれて、手にした御杖を投げ棄てました。すると、その杖は衝立船戸神となつて流れて行きました。次に投げ棄てられたのは御帶で、それは道之長乳齒神となつて流れました。それから次々に御裳をお棄てになると時置師の神、お召物は和豆良比能宇斯の神、猿股は道股の神、お冠は飽咋之宇斯能神となつて流れました。

次に左手の腕飾りの手纏をおすと、それが奥疎神、奥津那藝佐毘古神、奥津甲斐辨良神となりました。それから右の御手の手纏をおすと、邊疎神、邊津那藝佐毘古の神、邊津甲斐辨良の神となりました。

男神は川のながれをお見つめなされて居られました。

上の瀬は流れが早過ぎるし、

下の瀬は流れがゆる過ぎる……

と仰りながら、丁度中ほどのよい流れへさぶくとお入りになり、そこで、穢れた手足をおすゝぎになりました。その汚垢から、八十禍津日神と大禍津日神とお生れになりました。

男神はそれをおいやに思召され、その禍を直さうとしてお身をおすゝぎになりました。すると、そこに神直毘神、大直毗神、伊豆能賣神がお生れになりました。

それから、水の底までくぐつてお身をすゝがれた時に、底津綿津見神と底筒之男命がお生れになりました。

更に流れの中程を泳ぎながらお身をおすゝぎなされると、中綿津見神と中筒之男命とが生まれ、水の上に半分ほどお身を出されておすゝぎになると、上津綿津見神と上筒之男命とが生れました。この三柱の綿津見神は、後に阿曇の連らが先祖の

神としてお祀りした神であります。阿曇の連らは、この綿津見神のお子である宇都志日金拆の命の子孫であります。また底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命は墨江の住吉神社の神様であります。

さて、かうした後で、男神は左のお眼をお洗ひになりました。すると、そこに、け高く美しい天照大御神がお生れになりました。また右のお眼を洗はれますと、月讀命がお生れなさいました。續いてお鼻をお洗ひなされると、建速須佐之男命がお生れになりました。

伊邪那岐神は、これを見て大そうお喜びになりました。

「私はたくさんの子どもたちを生みに生んで、おしまひにこんな貴い三人の子を生んだ」

と仰有つて、此の三柱の神様に國を治める大役を仰せつけられました。

男神はお頭にかけていらつしやつた頸飾の長い緒で連ねた珠の、手にとればさら

くと音をたてるのを、天照大御神に賜はつて、

「お前は、高天原を治めるやうに」

と仰せられました。それから月讀命には、

「お前は、あの静かな夜の國を治めておくれ」

とおつしやいました。

須佐之男命には、

「お前は、あの大海原を治めなさい」

と命せられました。

後になつて、男神は淡海の多賀の社にお住のなさいました。

## 二、天の岩戸

須佐之

男命

三柱の神様は、それごとく伊邪那岐神のお言ひつけを守つて、命せられ

たまゝの國々をお治めになりました。天照大御神は輝く高天原を、月

讀命は静に湛へる夜の國をお治めになりました。が、たゞ海原を治める筈の須佐之

男命のみが、いつまでたつても大海原を治めようとはなさいません。もう長い

お髭が胸前に垂れるほどりつばな大人になつてゐなされるのに、日るも夜るも、赤兒

のやうにおいゝ泣き叫んでばかりをりました。それに、須佐之男命は生れつき御

氣性が荒々しく、勇猛なお方でありましたから、命がお泣きになると、青葉に茂る

山々も枯木の山になりさうでしたし、海も河も命の涙になつて涸れさうでした。す

ると、それにつけ込んで、よくない神さまたちが、そこらこゝらでわいゝと騒ぎ

立てました。

伊邪那岐神は、此の様子をごらんになつて、びつくりなさいました。何せあんなにも泣いてゐるのだらうと思はれましたので、さつそく須佐之男命をお呼びになりました。さうして、

「何故お前は、さうして毎日々々泣いてばかりゐるぞ。海原を治めるのがいやなのであるか、それとも何か外に考へがあるのか」

とお尋ねになりました。

頭をさげてきいてゐた須佐之男命は、涙にちんだお顔を上げて、

「私はお母様が戀しいばかりに泣くのです。私は海原などを治めるより、一そお母様の行かれた黄泉の國へ行きたいのです。」

とお答へになりました。

それをきかれると、伊邪那岐神は大そうお怒りになりました。

「なに？海原を治めるよりも根の國へ行く方がよいと申すのか。不都合な奴め。」

私のいふことをきかずに、そんなことを思ふやうなものは、此の國へおくわけに行かぬ。よし、どこへでも勝手なところへ行つてしまへ」

とおつしやつて、追出されてしまひました。

しかし、須佐之男命は、別におごろいた様子もいたしません。

「では、お姉様にお暇乞ひをして、それから出かけませう」

と仰有つて、かゞやく高天原へと、まつしぐらにかけ上つて行かれました。その勢ひはまことに凄まじいもので、山といふ山、川といふ川が、一どきにごろ／＼と鳴りわたり、地の上にある國といふ國は、ことごとくゆらくと揺り動きました。

天照大御神は高天原にお出でなされて、すぐそれとおさとりになりました。

「あの、亂暴ものゝ弟が、あゝも凄まじい勢ひで上つて來なされるのは、決して只事ではありますまい。きつと、私の國でも奪ひ取らうとする悪い心をおこしたのでせう」

と仰有つて、さつそく、それを防ぐ用意にかゝりました。

そこで、大神は、先づ男のお姿にならなくてはなるまいといふので、御髪をバラリと解かれ、それを美豆羅といふ男鬘に結はれました。さうして、左右に垂れ下げた美豆羅や、結へてあるお髪飾りの蔓草にも、左右のみ手にも、八坂の曲玉をいくつも緒に貫いた飾り珠をお巻きになりました。さうして、背には千本の矢を入れる鞆を負ひ、横腹にも五百本の矢の入つた鞆をおつけになりました。また左のみ手には、弓の弦が觸れると音のする鞆をつけ、大弓の腹を振り立てながら、堅い土のお庭に立たれ、兩足のづぶくと埋るほど力足を踏みつけ、お庭の砂を沫雪のやうに蹴散らかしてお待ちになりました。

やがて須佐之男命は、凄まじい勢ひで高天原に上つてまゐりました。

大神は、それをお迎へなされて、強くお尋ねになりました。

「何で、あなたはそんなに荒々しく上つて來ますか？」

と仰有つて、弟の返事を待ちました。須佐之男命は、

「姉上様、私は決して悪い心で上つてまゐつたのではありません。おきゝ下さい、實は、私あまりだだをこねてゐるのがお父様に知れて、『何せお前はさう泣くぞ、海原を治めるのがいやであるか』とお咎めを受けましたから、『私はお母様の國へ行きたくて泣いてゐるのです』と申し上げましたところが、お父様は大そうお怒りになられ、『その様な不届なものは私の國へおくわけにいかぬ。どこへでも出て行つてしまへ』と、きついお叱りをうけてしまつたのです。で、そのことを姉上様にお知らせしながら、お暇乞ひにまゐつたばかりで、少しも悪い心などは持つて居りません」

と言ひわけをいたしました。けれども、大神はまだ油斷をいたしません。

「でも、その言葉だけでは、本當のことは分りません」と仰有いました。

「……………」

暫くしてから、命がお答へなさいました。

「では、かうしたらどうでせう。私たちは自分々に誓つて子供を生んで見ませう。その生れた子によつて、私の心の正しくないか正しいかを定めませう。若し私の心が正しくないなら、荒々しい子が生れるにちがひありません」

大神もそれがよからうと御承知なさいましたので、お二方は天の安河を挟んで、その兩岸へおわかれになりました。

そこで、先づ大神は須佐之男命のお腰につけていらした十拳の劔をお取寄せになられて、それをぼき／＼と三つに折られ、天の眞名井といふきれいな井戸水で、さら／＼とお滌ぎになり、それをお口の中へ入れてがり／＼と噛み碎き、息を大きくふつとお噴きになりました。すると、霧のやうに細かく噴かれた息の中から忽ち三人の女神がお生れになりました。その女神の御名は、多紀理毘賣の命と、市寸島

比賣命と、モウ一方は、多岐津比賣命と申されました。

その次は、須佐之男命の番になりました。命は、大神の左の鬢におまきなさつてゐられた珠のお飾りをお受けになつて、同じやうに天の眞名井の清い水でさら／＼とおすゝぎになり、それをがり／＼とお口で噛まれ、同じやうにふつとお噴きになりました。その息吹の中から生れたのは一人の男神で、御名を正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命と申しました。

次に、右の御髪の飾りの珠を受け、同じやうに眞名井の水で滌いで、噛みくだいて、ふつとお噴きになりました息吹の中から、天之菩卑命がお生れになりました。

それから、御鬘にまかれてあつた珠をお受けになり、それを噛んでおふきになると、その息吹の霧の中から、天津日子根命がお生れになりました。

また左の御手にまかれてありました珠をお受けなされて、同じやうに噛んでふかれた霧の中から、活津日子根の命、右の御手の珠を噛まれてふき棄てる息吹の中

から、熊野久須毘の命がお生れになりました。

その時、大神は、

「後で生れた五人の男の子たちは、みな私の玉飾りの精から出来たのですから、私の子供に違ひありません。前に生れた三人の女の子たちは、お前の劍の精によつて出来た子ですから、あれはお前の子供に相違ないでせう」

と仰有いました。この三人の女神も五人の男神も、その子孫は、その後長く續いて榮えました。

須佐之男命は、大神のお言葉を聽いて大そう喜ばれました。

「ごらんなさい。私の心が正しかつたから私の生んだ子は、みんな優しい心を持つた女の子になつたのです。これで、私の申したことが本當だとおわかりでせう」といつて、威張り出しました。

岩戸が  
~~~~~  
須佐之男命は、ご自分のお心がわるくないことになつて、高天原にお  
く  
れ  
~~~~~  
止りになりますと、急に威張り出して、いろ／＼亂暴なことをし出か  
しました。

命は先づ、大神のご丹精なされてお作りになられた田に行つて、その畔を壊したり、溝を埋めたりしました。田を守る神様は大そう驚いて、急いでこのことを大神に申上げました。けれどもお情けぶかい大神はお怒りにもならず、

「それは、弟が土地を惜しんでしたことでせう。捨て、置きなさい」と仰有つたゞけでした。

それを却つてよいことにして、命は今度は大神がお初穂を神様にさゝげたり、御自分にも召上る御殿に上つて、汚ないものなどをたれ散しました。

「これは、あんまり苛いことをなされる」と云つて、御番の神様から申上げますと、





「それは苛い亂暴なことをされたが、きつと、あの弟が酔ひどれてしたことであらう。まづ／＼捨て、置きなさい」

と仰有つて、少しも命をお憎みにはなりませんでした。

それを又よいことにして、命の亂暴は愈々増長してまゐりました。

或る日のことでした。高天原には雲一つなく、大神の輝く御威光のために大空はあくまで美しく晴れ渡つてをりました。大神は忌服屋といふ御殿の中にお出で、神様へお供へする布を女たちに織らせていらつしやいました。水の流れのやうな縦糸の間を、生きものゝやうに細長い梭が走る毎に、ボタン／＼とちひさな音が立つてゐました。美しい布が一寸二寸と織伸されて行きました。

その時。

だしぬけに、屋根の上から恐ろしい音を立て、落込んで來た氣味の悪いものがありました。それは、天斑馬の、逆剝ぎに剝がれた、見るからにももの凄いなものでした。

機織りの女はびつくりして其處に倒れ、梭の尖つた先に下腹を刺されて死んだものもありました。

大神はそれをごらんになりましたが、やがて、それがやはり弟の命の亂暴な徒らだといふことが分りますと、たうとう本當にお怒りになりました。

そこで、つとお立ちになると、大神は天の岩屋にお入りになり、入口の岩戸をびたりと締めてしまはれました。

世の中が俄に暗くなりました。晴れ渡つた大空も御殿も、田も畑も神々も、みんな闇の黒幕に包まれてしまつて、西も東も分らないやうになりました。晝だか夜だか分からない時が、永く／＼つゞきました。

高天原では本當に困つてしまひました。たゞ悪い神たち丈けは喜びました。悪い神様は五月の日の蠅のやうに立ちはだかつて騒ぎ立て、亂暴のしたい限りをつくしましたから、高天原では一そう困つたのです。

大<sup>おほみ</sup>神<sup>かみ</sup> 八百萬の神々はお考へになりました。が、何としても、大神に岩屋かの再<sup>さいげん</sup>現<sup>げん</sup>~~~~~ら出て頂く外ありません。併<sup>しか</sup>し、どうしたらお出しできようかといふので、天安<sup>あめのやす</sup>の河原<sup>かはら</sup>に集つて、ご相談をなさいました。

いろ／＼と御相談のあつた末に、思兼<sup>おもいかね</sup>の神といふ高御産巢日<sup>たかみよのうぶ</sup>の神の御子様が、一番によいことを考へつきました。神々はみんなその考へに賛成いたしました。

そこで思兼の神のお考へごほり、天の岩戸の前に、常世<sup>とこよ</sup>の長鳴鳥<sup>ながなきどり</sup>といふ鷄<sup>とじ</sup>を幾羽も幾羽も集めて、一どきに鳴かせました。それから、天安の河原の河上から、堅く大きな岩をとり、天の金山から鐵<sup>くろがね</sup>を拾はせて、天津麻羅<sup>あまつまら</sup>といふ鍛冶工<sup>かじや</sup>を呼び、伊<sup>い</sup>斯許理<sup>しこり</sup>度賣<sup>どめのみこと</sup>命に命じて八咫<sup>やた</sup>の鏡をつくらせました。それから、玉祖<sup>たまのやのみこと</sup>命に仰せて、八尺<sup>やさか</sup>の勾玉<sup>まがたま</sup>を作らせました。その次ぎには、天兒屋<sup>あまのこやね</sup>の命と、布刀玉<sup>ふとたま</sup>の命をお召しになつて、天の香山<sup>かやま</sup>の牡鹿<sup>をしか</sup>をおさへ、その肩の骨をすつぽり抜いて、同じ山に生えてゐた天の波波迦<sup>ははが</sup>の皮を焚<sup>た</sup>いた火で焼いて、それで占<sup>うらな</sup>はせました。

それから、同じ山の榊<sup>さかき</sup>——小枝の茂つて瑞々<sup>みづく</sup>しい緑葉<sup>みどりば</sup>のついた榊を根こぎにし、その上の枝に八尺<sup>やさか</sup>の勾玉<sup>まがたま</sup>をつけ、中の枝に八咫<sup>やた</sup>鏡<sup>かみ</sup>をかけ、下の枝には白い布片<sup>ふきれ</sup>と青い布片<sup>あざいふきれ</sup>とを垂れさげました。これは、天照大神へ奉るお品として、布刀玉<sup>ふとたま</sup>の命が捧げ持つて、天の岩戸の前に立ちました。かうしておいて、さて天の兒屋<sup>こやね</sup>根<sup>ね</sup>の命が、朗らかな聲をはりあげてお祈りの祝詞<sup>のりと</sup>をよみました。その朗々<sup>らうらう</sup>たるお聲を聴きつゝ、天手力男神<sup>あまのたぢからをのかみ</sup>はそつと天の岩戸の外に進み、岩かげに身を潜<sup>ひそ</sup>ませました。若し大神が少しでも戸をお明けになられたら、その大力<sup>だいきり</sup>によつて岩屋の戸を押開けようといふのです。

その時、天<sup>あま</sup>の宇受賣<sup>うづめ</sup>の命といふ女の神様は、天<sup>あま</sup>の香山<sup>かやま</sup>からとつてきた日かげかつらを襟にかけ、天<sup>あま</sup>の眞拆<sup>まさま</sup>を髪かざりに結びつけ、天<sup>あま</sup>の香山<sup>かやま</sup>の篠笹<sup>しのささ</sup>の葉を両手に持ち、葉音<sup>はね</sup>さら／＼、岩戸の前に大桶<sup>おほぶけ</sup>をうつ伏せた底の上に立つて、とんとんと足拍子<sup>あしうた</sup>おもしろく踊り初めました。この宇受賣<sup>うづめ</sup>の命は、元々おもしろい神さまでしたが、

踊に身がいつて來ると、丁度なにかの憑物でもついたやうに夢中になつて踊りつゞけました。しまひには、ご自分の白いお胸をすつかりはだけ、ふつくらしたお乳を垂れさげ、帯をお臍の下までもさげてしまつて、いつまでも面白さうに踊るのでした。八百萬の神様方は、この様子をごらんになつておかしくてたまりません。高天原の國士の動くほごお笑ひになりました。それは、本當におかしかつたのでせう。

神々の笑はれるお聲は、岩屋の中までも聞えました。天照大神はかすかにそれをお耳にされて、ふしぎに思し召されました。

「さて、ふしぎなこともあればあるものよ。神々は何んであんなに騒ぐのであらう？」

と思はれましたから、そつと岩屋の戸にお手をかけさせられ、細目に戸をお明けになつて、中から、かう仰有いました。

「これさ、私がこゝに隠れてゐたら、高天原は自然に暗く、葦原の中つ國もみんなまつくらであらうと思ふのに、どうして、天宇受賣はそんな樂をしてゐるのか。また、八百萬の神々は何がおかしくてそんなに笑ひさゞめくのか」

そこで、天宇受賣の命がお答へ申上げました。

「あなた様よりも、もつと〜貴い神様がいらつしやいましたから、私どもは喜んでおいはひ申して居るのでございますよ」

と申上げたとき、天兒屋根の命と布刀玉の命とが、八咫の鏡をそつと大神の御前にさし出しました。その鏡の中には、大神のお姿がそつくりお映りになりました。

大神は御鏡に映る御自分のお姿をお見わけかねて、ふしぎにごらんないました。「や、あれは、あの神は誰であらう？」

と思召され、思はずお身體を半分ほど出されて、鏡に映るお姿をごらんないました。それを見ると、戸の外に待ちかまへてゐた天手力男の命が、素早く岩屋の戸に

手をかけてがらくと押開け、大神の御手を取つてお出し申上げました。布刀玉の命は、スグしめ繩を大神の後に張りわたして、

「もう、もう、二度と此の中へはお還り下さいませぬやうに」と申上げました。

大神は再び出現なさいました。高天原も葦原の中國も、又々明るい國土に變り、闇におどつた悪い神々はたちまち姿をかくし、この世の平和を誰れも壽ぐやうになつたのであります。

### 三、大蛇たいぢ

逐はれ  
た須佐  
之男命  
天照大神が天の岩屋をお出ましになられたので、高天原も中つ國も、美しく照り輝く日が來ました。そこで、八百萬の神々さまは、二度とあんなことの無いやうにしたいといふ願ひから、これから後のことについて御相談をなさいました。

さうして、今度のごときは、すべて須佐之男尊の亂暴したことが因になつてゐるのですから、命を厳しく罰することに決めました。そこで、命には此の罪をつぐなふために、先づたくさんの倉に一杯になるほどの品々を出させました。それから、命の黒く長い髻を皆んなたち切り、手や足の爪をぬいてしまつた上で、高天原を逐ひ拂ひ、遠い根の國へ流してやりました。

須佐之男の命は、おとなしく神々の命令に従ひました。さうして高天原を立たう

としましたが、お腹が空いてゐましたので、大氣都比賣の命に向つて、

「何か、食べ物はないか」

と仰有いました。

大氣都比賣の命は、お料理の方の神様でしたから、お言葉のまゝに食べ物を作りました。命はお臺所に入つて鼻や、口や、お尻などから、いろ／＼の食物を出してお料理をいたしました。それをそつとごらんになつた須佐之男の命は、大そうお怒りになりました。

「おのれ、汚ないことをする奴め、そんなものが食べられるか」

と仰有つて、たゞ一打ちに大氣都比賣の命を斬り殺してしまはれました。ところが、その殺された命の亡骸から、ふしぎやさまざまな物の實がなりました。

先づ頭からは、かあいらしい蠶が生れて匂ひ出しました。二つの美しいそのお目からは、みづ／＼しい稻の實がみられました。また両方のお耳には粟の實がみのも

りました。鼻からは小豆、お腹からは麥、お尻にはまるまるした大豆がなりました。

これ等は、みんな我々の生命をつなぐに無くてならない大切な種であります。

神御産巢日の神さまは、これをお集めになられて穀物の種になさいました。大氣都比賣の命は豊受大神と申しまして、伊勢の外宮にお祀りされる神様です。このことはこの本の第八のところではしくお話いたします。

### 一本の

### 箸が？

高天原を逐はれた須佐之男の命は、遠い旅路を、はるばる根の國さしられながら、やうやくのことで、出雲の國なる肥の川の川上にある、鳥髪といふところまでお出になりました。

命は、しばらく川のほとりにぼんやりと立つて、山川草木を眺めて居られました、山かげをゆく川の水は穏かに流れてゐました。川の中には元氣な魚が美しい鱗を見

せて泳ぎました。命は、吸ひつけられるやうに水の面を見つめてゐました。あたりに人らしいものもなく、怪しい鳥の聲や獸の叫びが、そここゝに起つて、山中の静かさを破りました。

その時、命の鋭いお目が、流れのまに／＼たゞようて来る一つのふしぎな物に止まりました。

それは、一本の箸でした。

「あッ、箸だ……箸が流れて来た。して見ると、こんな川上にも住んでゐるものがあるに見える」

と獨語をなさいました。

それと一緒に、命の足は、磁石に吸はれる鐵のやうに、川上の方に向つて運ばれていきました。

川上には深い森がありました。その静かな森の中にさまよひ出られた命は、耳ざ

とくも人のすゝり泣くやうな聲をどこからとなくきゝつけました。命はふしぎに思召されて、そこち森の中をお歩きになつて、その泣聲の主をお尋ねになりました。

それから間もなく、命は一本の大樹の下にゐて、一人の少女を中にして泣いてゐるお爺さんとお婆さんの姿を見つけ出しました。三人の親子は、命のいらしやつたことなどは知らず、何事かを云つては悲しさうに泣聲を洩してゐるのでした。

どうしたことかは知りませんが、きつとこれには深いわけがあるのだらうと思召された命は、三人のところへ立寄ると、先づ

「お前がたはごういふものか」

とお尋ねになりました。三人はその聲に驚いてふりむきましたが、やがてお爺さんが形を正して、

「はい、私は大山津見の神の子でございまして、名は足名権と申します。妻の名は手名権と申し、この娘は櫛名田比賣と申します」

と、ていねいに答へました。大山津見の神といふのは、この國の神様のお名前でした。

命は重ねて、

「それで、よく分つた。が、何でまた、大山津見の子がそのやうに泣いてゐるのであるか」

とお尋ねになりました。

お爺さんは、涙をふいて、

「はい、これには深いわけがございます。どうぞ、聞いて下さい、私たちには最初、八人のわかい娘がありました。親子十人、私たちは仕合せな月日を送つて居りましたのに、その後、高志こしの國から恐ろしい八岐の大蛇やまろといふものが出て來るやうになりました、毎年々々、一人宛の娘がとられてまゐりました。憎いにも口惜くちしいにも、私どもの力には叶かなひません。今はたつた一人残つた此の娘さへ、今

年は食はれてしまふので……それが恐ろしくて、悲しくて、かうして泣いてゐるのでございます」

と物語つたまへ、三人はまたすゝり泣いてしまふのでした。

おろち

命はちつとお爺さんの物語を聴ものがたりいて居りましたが、大そうかわいさう

退治

に思はれました。御心の中では、何とかして此の親子を助けてやらう

と考へましたから、

「それは氣の毒なことだ。それで、その大蛇といふのは、どんな形をしてゐるか」と親切にたづねました。

お爺さんは、

「左様でござります。その大蛇と申しますのは、酸漿ほんすきの實のやうに眞赤まっかな眼を持つたやつで、頭が八つ、尾が八つもある恐ろしい姿の大蛇であります。そればか

りか、大蛇の身體には一面に青い苔が生え、それに檜や杉の木が茂つてをるのでございます。あれが八つの頭をふり立て、其の長々した身をうねらせますと、八つの深い谷と、八つの広い山裾が、すつかり巻かれてしまふのです。その腹はいつも眞赤な血で爛れてをります。眞に恐ろしい魔ものです」と、いかにも恐ろしさうに物語りました。

命はすつかりこれをお聴きになり、

「宜しい。心配することはない。その大蛇はわたしが退治してあげよう。その代り、その娘をわたしにくれまいか」

とおつしやいました。

老人夫婦は互に顔を見合せて居りましたが、言ひづらさうに命を見上げ、

「失禮でござりますが、あなた様はどなたでございませうか。私どもはお名前も存じませぬが……」

とおたづねするのです。

命はお笑ひになられて、

「成程、これはわたしがわかるかつたぞ。わたしは天照大神の弟、須佐之男の尊といふものだ。今、高天原からまゐつたばかりのところだよ」

とお答へなさいました。

老人夫婦はそれを聴いてびつくりし、改めて、ていねいに手をついて、

「左様でございましたか。これは、誠に失禮を申し上げます。どうぞお許し下さいませ。足りない娘でございますが、思召しに叶ひますならば、仰せのまゝに差し上げるでござりませう」と申上げました。

命はお喜びになつて、それから、大蛇退治のしたくにかゝりました。

命は、先づ櫛名田比賣を一つの櫛に化けさせてしまひ、それを御自分の髪におさ



しになりました、さうして、老人夫婦に向つて、

「お前たちは、うんとたび／＼しぼつた強い／＼お酒をつくつておくれ。それから、家のまわりにはきびしい垣をこさへ、その垣へ八つの門を作り、その門の中には一つ毎に必ず棧敷を拵へるのです。さうして、その棧敷にはみんな酒ぶねを一つづゝ置いて、それに強いお酒をどつさり入れなさい。さうして、大蛇の來るのを待つておくれ」

とお言ひつけになりました。

足名椎と手名椎とは、仰せに従つて一生けんめい其の用意にかゝりました。

やがて、命のおつしやつたとほり用意が出來ましたので、命は用心ぶかく大蛇の出て來るのをお待ちになりました。

もの靜かな出雲の山々が夕暗につゞまれて、野にも山にも、底の知れないやうな物凄さがたゞよつてをりました。高い／＼天上には、銀の粉をまいたやうな星の光

が、かすかな瞬きを通はせてをりました。

この時！ 大空の一方から、魔物のやうに現はれた一團の黒雲がありました。と見る間に、その雲はむら／＼と押しひろがつて、忽ち空一面をおほひかくしてしまひました。

その時でした。

漆のやうにくらい闇の彼方から、眞赤な草の實のやうなものが、そろ／＼と近づて來るのを認めた命は、黙つてそれを見つめて居りました。だん／＼近づいたのを見ますと、それが待つてゐた八岐の大蛇の赤い眼でありました。

命はだまつて、ちつとそれをごらんになつて居られました。

何事も知らない大蛇は、大山のゆらぐやうにそこまでも來ますと、早くも好きな酒の香を嗅ぎつけました。酒好きな大蛇のことですから堪りません。忽ち八つの頭を八つの酒ぶねに突込んで、がぶ／＼強いお酒を飲みはじめました。

三、大蛇たいぢ



五五

るさば遊治退を蛇大の岐

建國の巻



五四

八てつよに義…武勇の命

命がそつと見てゐなされるのも知らず、大蛇は夢中になつて酒ぶねにかぶりついてゐます。お酒の減るにつれて、大蛇は漸く酔つて来る様子でしたが、間もなく酒ぶねのお酒は空になつて、大蛇はそこに酔ひ潰れてしまひました。八つの頭は酒ぶねの上に凭れて、ぐつすり睡つてしまひました。

須佐之男の命は、これをごらんなされてお笑ひになりました。

「愚かな奴め」

とおつしやつたかと思ふと、お腰におつけになつてゐられた十拳のお劔を、スラリと抜き放ちました。

秋の水のやうに、澄みきつた劔の切尖が、忽ち大蛇の頭を切り、腹を切りました。さすがの大蛇にも少しの手向ひさへ出来ません。

命は劔を振つて大蛇の身體をすたくにお斬りになりますと、中ほどにまゐりました時、お劔の尖ががちりと音を立て、毀けました。

「オヤ？」

ふしぎに感じた命は、劔を取直し、そのところを割いて見ますと、意外にも、そこから立派な一振の劔が出てまゐりました。命はそれをお手にとられて熱々としらんになり、

「これは貴い劔である。このまゝ自分のものにするわけにはいかぬ」

とおつしやつて、高天原にをられる、天照大神のところへ差上げました。これが天叢雲劔で、後には草薙劔と申しました。

さて、命が大蛇を退治なさいますと、老人夫婦はいふまでもありません。大蛇の爲めに長いこと難儀をしてゐたものどもの喜びは、なみ一通りではありません。それからは、肥の川上にも、平和な月日が恵まれるやうになつたのであります。

出雲 須佐之男の命は、それから櫛名田比賣と共に長くお住みになるべき地  
八重垣 を求めて、あちらこちら、出雲の國を歩いて、よい土地をおさがしに  
なりました。

命は、山を踏へ野を渡つてお探しになりましたが、なか／＼お氣に入りの土地が見つかりませんでした。それでも、命は毎日のやうにそちらこちらと探してゐますと、或る日、須賀といふ處にまゐりました。山のかたち川の流れの美しい里、命はその風景がすつかりお氣に入りになつてしまひました。

「あゝ此處はよい處だ。私は此處へ来て初めてこの心が清淨しい」  
とおつしやつて、そこを住みかの地と定め、こゝに立派な御殿をお建てになられました。

たくさんの人達が、毎日々々、御殿を造るために須賀の里で働きました。命がおさしづをされてゐますと、その時木立から谷あひから、白い雲が、むらく／＼と立上

りました。命はそれをごらんになつて、こんな歌をおよみになりました。

八雲立つ

出雲八重垣

夫婦ごみに

八重垣作る

その八重垣を

とお歌ひになりました。

あゝたくさんの雲が立つよ

その雲が八重の垣根を作るよ

私たちの住家のために

八重の垣根を作つてくれる

その八重垣雲よ

三、大蛇たいぢ

といふ意味のお歌です。三十一文字の和歌が日本に起つた起源は、命のこのお歌であつたと申します。

御殿が出来てから、命は足名椎の神をお召しになられ、

「あなたは、この宮殿の役人の首になりなさい」

とおつしやいまして、その名も稻田の宮主、須賀之八耳神とお改め下さいました。

### 四、因幡の白菟

出雲の神々

須佐之男の命を御先祖として、出雲の國にはその子孫の神々が、彌祭に祭えてまゐりました。須佐之男の命から五代目の御子が天之冬衣神ですが、今その系圖を記して見ませうなら、

須佐之男命

八島士奴美神

櫛名田比賣

木花知流比賣

布波能母遲久奴須奴神

日河比賣

深淵之水夜禮花神

天之都度閑知泥神

游美豆奴神

布帝耳神

天之冬衣神

刺國若比賣

大國主神

といふやうになります。この五代の神々には、特別にお話するほどのことも傳はつて居りませんが、天之冬衣神と刺國若比賣とのお子さまである大國主の神には、いろ／＼のお話があるのであります。大國主神にはいくつものお名前があつて、大穴牟遲神とも申しました。葦原色許男神とも申しました。また、八千矛神とも、宇都志國玉神とも申しましたから、都合五つものお名前があつたのです。

**大國**

大國主の神には、何十人といふ御兄弟たちがありました。そんなにな

**主神**

くさんの御兄弟がありましたのに、一番年上といふのでもなかつた大

國主の神さまが、お後を嗣いで出雲地方の主となられたのです。なせ、さういふことになられたのか、そのお話をいたしませう。

そのころ、稻羽（因幡）の國に、八上比賣と申して、それは／＼美しいお姫さまがありました。

大國主の御兄弟の八十神たちは、誰れも此の美しい八上比賣を、御自分のお嫁さんにしたものだと思望んで居りました。

そこで、或る日のこと、八十神たちは打連れ立つて稻羽の國へ、はる／＼姫を訪ねてまわりました。大國主の神は、小さい弟でありましたから、兄神たちの旅の荷物を入れた大きな袋を背負はされて、一番後からついてまわりました。兄神たちが美しい姫を探しに楽しく連立つて行く後から、大國主の神は、重い荷物をエンサラエンサラ擔つて、大人しくついて行くのでした。

**稻羽の**

やがて一行の神々は、稻羽の國に入つて、氣多の濱を歩いてをりま

**白菟**

した。あの、果てもなく広い荒海の彼方から寄せてくる波濤も、今日

はおだやかに磯を打つて、そこには生茂る葦蒲の茂みの中に、よしきりの聲ばかりがあわたしく聞えてゐました。

その波打際の岩かげに、ごうしたのか全身の毛を一本残らず掻りとられた一匹の菟が、めそめそと泣いてゐました。目ざとくそれを見つけ出した一人の神様が、

「やこれは面白い。この菟は裸だよ、ごうしたと云ふのだらう。これ菟、その姿では困るだらう。わしがよいことを教へてやらう。な、いゝか。お前は早くあの海へ入つて潮を浴びるのだよ。さうしてあの陸へ上つて涼しい風に吹かれるのさ。それでなくては直るものでないぞ」

と申されました。

菟はそれを聴くと喜んで、

「どうも有りがたうございます。では、早速そのやうに致します」

と云つて海岸へ出て行きました。

「ハ、ハ、ハ、少し我慢しろよ。チキ直る」

と笑ひながら、神々はそこを立去られました。

喜んだ菟は、岸へ下りてスグ潮水を浴び、教へられたやうに丘へ上つて行きました。涼しい風がそよ／＼と吹いて身體はだん／＼に乾いてまゐりました。乾くにつれて、身體の皮がピリ／＼して、その痛いこと／＼云つたらたとへやうもない程です。それでも菟は、「我慢をしろ」と云はれた神様方の言葉を信じて、出来るだけの辛棒をして見ましたが、しまひには身體の皮が裂けて破れます。その痛さは全く堪へ切れなくなりました。

「痛い、痛い！」

といつて、菟は狂氣のやうに丘の上から轉び落ち、元来たところへ来て悶え泣いてゐました。その時になつて、初めて前の神様方にだまされたのだと知りましたが、もうだめでした。

丁度その時、八十神たちに後れてお通りが／＼になられたのが大國主の神でした。大きな袋を背中にのせた大國主の神さまは、そのお情け深い御心から、御自分のこ

となどはお忘れになつて、一匹の菟をかあいさうに思はれました。

「菟や、お前はごうしてさう泣くのだ」

と、親切にお尋ねになりました。菟は痛さを堪へて先づお禮を申上げました。

「有り難うございます。よくお尋ね下さいました」

大國主の命はお情け深い聲をかけて、

「お前の身體は、それはごうしたのだ」

とおつしやつて、菟に近よりました。

菟は本當に有りがたく思ひました。

「有り難い神様、これにはわけがあるのです。どうか一と通りお聴き下さいませ。

私のもと隠岐の島に住んで居りました。が、早くから此の島に渡りたいと念じてをりましたが、いくら考へても渡る術がありません。どうしたらよいかと、だん／＼考へた末に、とう／＼一つのよい考——誠にするい考へを起したのです。と

いふのは、この海にゐる鰐ざめをだまして渡らうとしたのです。私は或る日、その鰐ざめを欺いて、『どうだらう、お前たちの仲間と私たちの仲間とどちらが多くだらう』と話しかけました。鰐ざめがいふには『それは僕等の方が多に定つてゐらあ。この広い海原に、僕等の仲間は一杯だぞ』と威張りかへしますから、『そんなことがあるものか、我々の仲間は此の島山に充ち溢れてゐるんだぞ』と申してやりました。それでも鰐ざめが剛情をいふので、『よし、それではお前たち此の島から氣多の前まで一列に並んで見ろ。私はお前たちの背中を踏んで數へて見よう。さうすれば、ごちらの仲間が多いか分る筈だ』とまことしやかに申しますと、だまされるとは知らない鰐ざめは、さつそく仲間を集めてきて一列に長く氣多の前まで正直に並んでしまつたのです。私は心の中で嬉しくもあり可笑しくもあり、馬鹿な奴だと思ひながら、一つ二つと數へながら、甘く海を渡つて來ましたが、もう少しで岸に上らうとした時に、云はなければよかつたのを『やあ



貴様たちはいゝ氣なものだ。俺は此土へ渡りたかつたのだぞ」と笑つてやつたのがいけなかつたのです。私がさう云つたか言はない時、一番こちらにゐた鰐ざめが、「こいつ」と云つてしつかり私をつかんでしまひ、バリバリ私の毛を剥ぎとつてしまひました。

丸裸にされてしまつた私は、この濱べにころがつて身體の痛さに泣き悲しんでゐますと、今のさきお通りなされた八十神たちが、海の潮に浸り、風に吹かれて寝てゐたら直ると教へて下さいましたから、喜んでその通りにしましたら、どうしたことか私の身體は此のやうに裂け破れ、前よりも一そう痛みがましてまゐりましたのです」

と、涙をこぼして物語りました。

大國主の神は、それを聽いて大そう可愛相に思召されました。

「さうであつたか、それは氣の毒なことだ。そんなことをしたら、よけい痛くな

るに定つてゐる。早くあの小川に下りて、川の水でよく身體を洗ひなさい。さうして、川べの蒲の穂をとつてその上にころがるがよい。さうすれば身體はスグ直るよ」

と親切に教へてくれました。

菟は飛立つやうに喜んで、急いで小川の渚に駆けつけ、その水でジャブ〜灌いでゐましたが、やがて、そこへらに茂つてゐた蒲の穂をたくさんとつて、その上にごろ〜してゐますと、ふしぎに痛みはなくなり、身體はもとのやうに直つて、白く、美しい毛の生えた、稻羽の白菟になつたのです。

菟は嬉しくて〜なりません。涙の出るほど喜びました。そこで、大國主の神の前に畏まつてお禮を申し上げ、その後で、

「あの、八十神たちには、八上比賣をお嫁になさるお方は一人もごぞいますまい。あなた様は、さうして重い袋を背負はされてお出なさいますが、八上比賣をお嫁

になさるのは、きつとあなた様でございます」と申し上げました。

やがて大國主の神は、八十神たちのお供をして八上比賣のおうちへつきまじりましたが、八上比賣はどなたのお嫁さんになるのもいやだとおつしやいました。

「私は、あの、大國主の神のお嫁になりたいのですから……どなたのお言葉にも従ふことは出来ません」

と断りましたので、八十神たちは黙つてしまひ、たゞ憎々しさうに大國主の神を睨みつけてゐるばかりでした。

## 五、赤い猪・ほらく鼠

手間山  
の赤猪

八十神たちは、夫々自分が八上比賣をお嫁にしようとしてゐたのに、思ひがけなく弟の大國主の神のお嫁にとられてしまひましたので、羨ましくてなりませんでした。そこで、みんなで相談をして、一そのこと大國主の神を殺してしまはうではないかといふ、恐ろしいことを定めました。

もちろん、神々はこのつそり相談したことですから、大國主の神さまは少しもそんなことは知りません。

ある日のこと、八十神たちは大國主の神をだまして、

「今日は山狩りに行かうから、お前も一しよに來るがよい。面白いぞ」と誘ひました。大國主の神は、何も知りませんから、本當に山へ獸狩りに行くものだと考へ、

「まゐりませう」

と云つて、八十神たちの後について出かけました。

やがて神々は伯耆の國に入り、緑深い手間山の麓までまゐりました。すると八十神たちは大國主の神に向つて、

「此のお山にはふしぎな猪があるよ。それは眞赤な猪だよ。今、私たちが、山の上からその猪を追ひ落すから、お前は此處に待つてゐてしつかり捕まへるのだ。よいか、若し取逃したらお前を生かしてはおかないぞ」

と厳しく言ひつけて、がさ／＼山の上へ登つて行きました。

大國主の神は、言ひつけられた通り、麓の木かげに潜んで、今にも逃げ下りて来ようとする赤い猪を、今か／＼と待つてゐました。

暫くすると、山の上から物すごい響を立て、眞赤な猪が、大石の轉がるやうにころ／＼轉げ落ちて來ました。正直な大國主の神は、これを逃しては大變だと思ひ

ましたから、猪が目の前まで來るのを待つて、急にそこから駆出して、むんずとばかり其の赤猪に抱きつきました。

すると大變！

その猪と思つた赤い塊は、實は猪ではなくて、眞赤に焼けた石塊であつたのです。大國主の神はそれとも知らずに抱付いたのですから堪りません。ちり／＼と手足が焼け爛れ、全身が黒こげになつて、そのまゝお亡くなりになつてしまひました。

まもなく山を下りて來られた八十神たちは、大國主の神の黒くなつた姿を見て、「どうだ、甘くいつたぞ。これでいゝ」

と云つて喜びました。これは云ふまでもなく、八十神たちが山の上に登つて、猪に似た大石を焚火で焼いて落したのでした。

さて、此のことをお聴きになつた大國主の神のお母様は、それはそれはお氣の毒なほど嘆かれました。そこで、泣き／＼高天原をさして登つてまゐられました。さ

うして、神御産巢日の神にすがつて、大國主の神を助けて下さるやうにとお願いいたしました。神御産巢日の神はそれをお聴入れになりました。そこで蛭貝比賣といふ赤い貝と、蛤貝比賣といふ蛤貝に命じて、大國主の神を蘇生させるやうにと申しつけられました。

貝の 二つの貝は、急いで高天原を發つて此の島へまゐりました。たづねあ  
お使 二つの貝は、ふしぎなお醫者さんでした。大國主の神のご容態を見ると、蛭貝比賣はさつそく自分の殻を削つて、それを焼きこがしました。蛤貝比賣はその間に自分の身體から生命の水を絞りとりました。それから、生命の水を貝殻の粉に交せて、ごろ／＼にこねますと、お乳のやうなとろ／＼したお薬になりました。  
二つの貝は、そのお薬が出來上ると、それを取つて、傍にたふれてゐた大國主の

神の全身にべと／＼と塗りつけました。さて「これでよからう」といつて、暫らく様子を見て居りました。

やがて、大國主の神のお顔にさつと血の氣が甦つたかと思ふと、かすかな息がスーッと出て、又スーッと吸はれました。しばらく、呼吸が繰返されるうちに、お顔の色も益々よくなつて、

「う、うーん」  
と、いふ聲と共にカツとお眼を開かれ、驚いたやうにあたりを見廻して居られました。が、

「お、危い所であつた」  
とおつしやつたまふ、お歸りになりました。

かうして八十神たちの悪い企みは破れ、大國主の神は危い生命を助かりましたが、それを聞いた八十神たちは、それでもしつこく大國主の神を亡きものになしようと、

悪い相談をいたしました。でも、大國主の神は、決して兄神たちを憎みはしませんでした。

迫害に  
追はれ

て

それをよいことにして、八十神たちは、ある日また大國主の神を偽つて、ある山奥へ遊びにつれ出しました。さうして、山奥の大木を切り倒して二つにわり、その間にくさびを箆めておいて、その割目へ大國主の神を、ぐツと押込むと一緒に、くさびを外してしまひましたから堪りません。かわいさうに、大國主の神は一堪りもなく大木に挿まれて、息が絶えてしまひました。八十神たちは、

「今度こそ助からぬぞ」

といつて、逃げて行きました。

それを聴かれた大國主の神のお母様は、消え入るやうに驚かれ、飛ぶやうにして

其處へまゐりました。さうして、さまざまに手をつくして介抱なさいましたので、大國主の神は漸くのことで蘇生りました。

お母様は、大國主の神にお向ひなされて、

「もう、あなたは此の國にゐては危ない。かうまでしふねん深く八十神たちに憎まれてゐることですから、しまひには生命をとられてしまふかも知れません。ですから、しばらく遠い國へ逃げて行つておくれ」

としみじく申されました。大國主の神も、かう再々危ない目にあはされた八十神たちと一緒にゐたくはありません。

「では左様いたませう。で、どこへ行つたらよいでせう」

とお尋ねになりました。すると、お母様は、

「先づ、木の國（紀伊）までお出でなされて、大屋毘古の神にたよるが宜い」と申されました。

「では、さういたしませう」

といつて、大國主の神はそつと木の國への旅に立ちました。

ところが、八十神たちは早くもその事を知つてしまひました。「それ弟を逃すな」とばかり、どん／＼後を追つてまゐりました。さうして、八十神たちは盛んに弓矢を射かけましたが、大國主の神は上手に木の俣をくゞりぬけて、その場を逃げるこゝとが出来ました。

しかし、此のまゝ木の國へ向つたのでは、八十神たちの害が恐ろしいと思ひましたので、お母様の神は大國主の神に向つて、

「此の上は、須佐之男の命のお出でなさる根の堅洲國へいらつしやい。さうしたら、何かよい考へを授けて下さいませう」と教へました。

そこで、大國主の神は、はる／＼根の國さして旅立たれました。

根の堅

根の國は遠い／＼所でした。

洲國

大國主の神は、その遠い路を、艱難辛苦して、漸くのことで須佐之男

の命のところまでまゐりました。

そのとき、須佐之男の命のお娘の須佐理比賣が出むかへなさいました。比賣は大國主の神をごらんになると、につこりお笑ひになつてお家に入り、

「お父様、たゞ今、若くて美しいお方が尋ねていらつしやいましたよ」

と須佐之男の命に申上げました。

命はそれを聽いてお出迎へになりましたが、

「おゝ、これは葦原の色許男といふ神だ」

とおつしやつて、御殿の中へお通しになりました。が、少しもていねいにはしてくれませぬ。

その中に、根の國のたそがれが来て、暗い夜になりました。命は大國主の神を連

れて蛇の室へ入れ、そこで寝るやうにと申されました。

氣味の悪い蛇の室へ入られる時、須勢理比賣は、そーッと蛇の比禮といふ布を持つてきて、大國主の神に與へました。さうして、

「若し蛇が噛みつくやうなことがありましたら、此の比禮を三度お振りなさい。少しも恐れることはありません」

と教へてくれました。大國主の神は安心して、蛇の室へ入つてやすみました。

たくさんの蛇がその室にはうよく／＼して居りました。やがて夜もだん／＼更けて來ますと、蛇どもはかま首をあげてそろ／＼と匂ひ出して來ました。今にもかみつきさうな勢ひで大國主の神に近寄つてまゐりました。そこで、大國主の神は、先程の比禮を出して三度振りました。それを見ると、果して蛇どもはみんな丸くなつて、ぐる／＼とぐろを巻いて倒れてしまひました。

かうして大國主の神は、安らかに一夜を明すことが出來ました。



るさ試を力神命主國大……室な奇怪

須佐之男の命は、翌る朝になつて、蛇の室から事無く大國主の神の出ていらつしやつたのを見ると、心の中で驚きました。が、何ともおつしやいません。次ぎの晩になると、今度は別の石室へ案内してやすませました。

その室には、蛇より恐い、蜈蚣と蜂とがたくさん住んで居りました。が、その時にも、須勢理比賣がツゲと蜂除けの比禮をそつと渡されて、此の危難を免れるやうに教へて下さいました。

大國主の神は石室に入つてまゐりますと、恐ろしい蜈蚣と蜂とが、遽に四方八方から押寄せて来て噛みつかうとしました。そこで、また比禮を振りますと、忽ち蜈蚣は足が利かなくなり、蜂は翹を縮めて床に落ちました。大國主の神は此の夜も安らかに過すことが出来ました。

須佐之男の命は、愈々心におどろきました。が、ごこまでも大國主の神の力をお試しになるお考へと見えまして、今度は御自身で弓をおとりになり、鳴鏑といつて矢

尻に穴のあいた矢を番へて、野の草原に射込み、

「お前、あの矢を探して来い」とお命じになりました。

大國主の神は、云はれるまゝに野原に出て、がさごそ枯草をかき分けては探してをりました。それを見ると、須佐之男の命は、そつと出て行かれて、四方から此の草原に火をお放けになりました。

内はほ ばちくくと、野の火は紅の炎と眞黒な烟を漲らして焼けて來まらほら した。その物凄さと云つたらありません。大國主の神は今にも焼殺さ

れさうです、逃るにも逃げ路がありません。どうしようかと思つて、ふと見ますと足許から一疋の小さな野鼠が馳け出して來て、切りに何かをいふやうです。さてなと思つて耳をすまして聴きますと、野鼠は小さな、尖つたその口をあけ、



——内はほら、ほら。(がらん洞)  
外は、すぶ、すぶ。(窮屈だ)

と云ふのでした。大國主の神は考へて、

「内は、ほら、ほら……。内は？」

とおつしやいましたが、何かお悟りになつたと見えて、急に力をこめてどん／＼其處を踏みつけて見ました。すると、忽ち大地がわれて、「あッ」といふ間にその中に落込んでしまひました。そこは全くがらん洞の洞穴であつたのです。

大國主の神はそのまゝ洞穴の中にうづくまつてゐますと、もの凄い野火は頭の上をはげしく燃えて行つて、毛一筋焼かれることもなしに過ぎました。

「あゝ宜かつた」

と思つてゐますと、そこへまた前の鼠がちよろ／＼と出て來ました。見ると、野鼠の口には鳴鏑の矢が横に啣られてゐます。たゞ矢の羽根だけは子鼠のためにみんな

喰ひ切られてありました。大國主の神は喜んで、その矢を持つて洞穴を出ました。

もう野の火もすつかり消えて居りました。大國主の神は、その矢を持つて歸つて行きますと、野の末で、あちらから來る須勢理比賣とばつたり行逢ひました。

須勢理比賣は、今度こそ大國主の神は野火に焼かれて死んだものと信じてをりました。そこでお葬ひの道具などをお持ちになり、涙をこぼしながら出て來られました。須佐之男の命もさう信じたので、須勢理比賣と一緒に出てまゐりました。ところが、大國主の神は少しもお變りなく、鳴鏑の矢を手にお持ちになつて、

「矢を拾つてまゐりました」

と出しましたので、須佐之男の命は益々お驚きになり、一緒に連れてお家に歸りました。

それから、須佐之男の命は、大國主の神を間のいくつもある大きな室に連れ込んで、そこへごろりと横におなりになり、

「さあ、今度はおれの頭の虫をとるのだ」とおつしやいました。

大國主の神は、いはれるまゝに何の氣もなくお髪をといて、長いお髪をけつてみますと、驚いたことには、その髪の毛の間を、赤い蜈蚣がぞろぞろと匂ひまわつてゐるではありませんか。

**椋の實****と赤土**

大國主の神は、あまりのことにぼんやりしてしまひ、どうしたらよいか分りませんでした。するとその時、須勢理比賣がそつと、黒い椋の實と赤い土の塊とを大國主の神にお渡しになりました。黙つて、須佐之男の命にお分りにならないやうに渡されたのですが、かしこい大國主の神には、スグそれが分りました。

そこで、大國主の神は、椋の實の黒いのをつぶく噛み碎いて、紫がかつた唾液

の口へ、赤い土くれを少しづつ啣んで、それをばつばつとお吐きになりました。横に臥せつて其の様子を見てお出でになつた須佐之男の命には、それは丁度蜈蚣を喰殺して吐出してゐるやうにしか見えません。命は御心の中で、

「大國主は愈々膽つ玉の太い奴だぞ。蜈蚣を噛み殺してゐるわい。これは見所がある」

とお考へになりました。さう思ふと、須佐之男の命は心に緩みが出来、いつの間にかすやくとお睡りになつてしまひました。

それを見て大國主の神は考へました。かうして、いつまで此處にゐるでもあるまい。いや、かうしてゐたら、此の上ごんな難儀なことを仰付かるか分るものでない、幸にして今までは須勢理比賣の助けで危い所をきりぬけたが、此の後のことは保證が出来ない。

「さうだ、今のうちに逃げるが一番だ」

とお考へになりました。

根の國  
を後に

そこで、先づ眠つてゐなされる須佐之男の命の髪をとつて、そつと御殿の椽ごとに繋りつけました。それから、戸口の處には、若し命がお目ざめになつても直ぐ表には出られないやうに、五百人もかゝらなければ動かせないやうな大石を運んできて、ごつかり其處へおかれました。

かうして置けば、若し須佐之男の命がお目ざめになつても安心ですから、そこで大國主の神は、須勢理比賣をしつかり背中に負ひ、命の生太刀や生弓矢、比賣の天の沼琴などを小わきにかゝへて逃げ出しました。

と、その時！

どうした機みか天の沼琴が傍にあつた樹に突當つたものですから堪りません。天の沼琴は大地も震ふばかり凄まじい音をたて、鳴り響きました。大國主の神は、

「しまつた！」

とおつしやつたなり、今はぐずぐずしてゐられませんから、傍目もふらすたゞ一生懸命に、ごん／＼逃出してまゐりました。

須佐之男の命は、その物音にびつくりして目を覺しました。見ると、大國主の神が比賣を負つて一目散に逃げて行くところですから、か／＼になつて憤りました。「こいつ」と云つた命は、物凄しい勢ひで、御殿をめちゃ／＼に打壊してしまひました。が、その髪は椽に固く結びつけてありましたので、それを一々解いて居りました。その間に、大國主の神はごん／＼お逃げになりました。

併し、須佐之男の命は、その髪を解き終ると、矢のやうな勢ひで追ひかけてまゐりました。でも、なか／＼大國主の神に追ひつくことは出来ません。

命は、黄泉の平坂まで來たときに、遙に遠く大國主の神の走つて行く小さな後姿を認めました。併し、あの坂を上られては出て行くことが出来ません。此の上は

仕方がないとお考へになつたのでせう。

「おゝい、おゝい」

とお呼びとめになつて、

「おゝい、お前は其の生太刀と生弓矢とを持つて國に歸つたら、お前の悪い兄弟たちを坂の麓に追ひつめ、河の淺瀬に追ひやつて、國を安らかに治めるのだぞ。

それから、娘の須勢理比賣を妻にして、宇迦の山の麓の大岩の根にごつしりと柱をたて、空高く屋根をかまへた立派な御殿を立て、住むのだぞよ」

とおつしやいました。

大國主の神は、かへり見て命のお言葉を心に入れ、久しぶりに出雲の國へおかへりになりました。

### 大國主

### の神の

### 再現

御兄弟の八十神たちは、大國主の神のおかへりになられたことに大それた驚きました。そこで、又々よくない企圖をしたものですからたまりません。大國主の神は、その生太刀生弓矢を持つて、八十神たちを相手に勇ましい戦ひをいたしました。で、或るものは山の裾に追ひつめて斬りまくり或るものは川の瀬を渡つて追ひ飛ばし、悪い兄弟たちを皆んな平げて、須佐之男の命のおつしやつたとほり、出雲の國の基を固めました。

### 山田の

### 案山子

### の

それから、大國主の神には、事代主の神を初めたくさんのお子さんが生れ、出雲朝廷の御代は賑やかに祭えました。

これは、何年かたつて後のお話です。

ある日のこと。大國主の神は、出雲の濱の三保の岬に立つていらつしやいました。あの日本海の波濤は、幾重にもくかぶさつて、長い岸に寄せては返してゐま

した。その美しいうねりをちツと見てゐられた大國主の神様は、ふとその波がしらの間に浮んで来る小さいものを見つけて、

「おや」

と驚きました。

それは、天の羅摩あみといふ船に一人の神が乗つて來るのでした。その神は、火取虫の皮を内からすツぽり剥はいだのを衣物きものにして居る、おかしいほど小さい神さまでした。

やがて、その神が岸べにお着きになりました。大國主の神は、

「あなたは、どなたですか」

と云つてお尋ねになりました。けれども、その神は黙だまりこくつて何とも答へません。いくらお尋ねになつても答へませんので、

「誰れか知つてゐる者はないだらうか」

と云つて、お供してゐた神たちに尋ねましたが、だれも黙だまつてゐます。

「弱ちよつとつたな、誰れか一寸ぐらゐ知つてゐさうなものだが……」

と困つてゐますと、

「くくく、ぐぐぐ」

と咽喉のどを鳴らして、一匹の蟾蜍たにぐくがのそ／＼這ひ出して來ました。大國主の神が、

「お前は知つてゐるかい」

とお尋ねになりますと、蟾蜍たにぐくは平氣で、

「くくく、私は知らない。が、私はこの神の名を知つてゐるものを知つてゐると申しました。」

「それでは、誰れが知つてゐるのか教へなさい」

「ぐぐぐ、久延毘古くえびこが知つてゐませう」

久延毘古くえびこといふのは、山田の曾富そほ騰とどといふもので、足が一本しかないので歩くこ

とは出来ませんが、世の中のことは何でも知つてをりました。たゞ今、山田の案山子と呼ばれてゐるのがその神です。

大國主の神は、久延毘古を呼ばれました。さうして、

「お前は此の神の名を知つてゐますか」

とお尋ねになりました。すると、久延毘古は、

「知つてをります。これは神産巢日の神の御子さまで、少名毘古那の神です」と申されました。

大國主の神は、そこで、直ぐ高天原にいらつしやる神産巢日の神のところへ、それが本當かどうか伺ひにやりますと、

「それは本當に私の子だ。あの少名毘古那の神は、子供のころ私が手の股から思はずすべり落したものだ」

とおつしやつて、それから少名毘古那の神には、

「お前は大國主の神と兄弟になつて、確りした國土を造るやうにきなさい」といふお言ひつけがありました。

大國主の神は、思はぬところでよいお相手を見つけたことを喜びました。そこでお二人の神は力をあはせて、出雲の國を固くくおつくりになりました。けれども、未だ、考へたとほり全部の仕事の終へない内に、少名毘古那の神は、海を踰へて遠いく常世の國にお渡りになつてしまひました。

大國主の神は、大そうお力を落されて、ぶら／＼出雲の海のほとりをお歩きになられました。油のやうな海の水は、遠い沖から幾重ともないうねりを見せて、美しい沙の濱に寄せては返してゐました。大國主の神は、その岸の上に立つて、

「あゝ、私は一人になつてしまつた。誰か私に力を添へてくれる神はなからうか。一人で此の國を治めて行くことは六ヶしいことだ……」

とひとりごとをなさいました。

と、此の時。

かぎりなく広い大海原が、バツと黄金色こがねいろに輝き渡りました。ふしぎに思はれた大國主の神が、ちツと沖の方をごらんなさいますと、その眩まぶしいほどの光の中から、一人の神さまが現はれました。

その神さまは、大國主の神に向つて、かうおつしやいました。

「あなたが、若し私をよくお祀りまつして下さるならば、ご一緒に此の國をお治めしてまゐりませう。が、私をお祀りまつして下さらぬなら、決してこの國はよく治おさまりませぬよ」

そこで、大國主の神は、

「それでは、どんなにお祀り申したら宜よろいのでせうとお尋ねになりました。

その神さまがおつしやるには、

「たゞ大和の國の東にある、青々した山の上に祀れば宜よろいのです」

といふのでした。そこで、大國主の神は、此のお言葉ごほり、此の神さまをお祀りまついたしました。

大和の國の東に青々とした山といふのは、御諸山みむらやまのことで、此の神こそ今も御諸の山にお祀りしてある神様です。

## 六、國ゆづりの巻

天のお話が變つて、高天原にいらつしやる天照大神さまのお話です。豊葦原の中つ國をよく治めさせる爲めに、いろ／＼とお考へなされました末に、

「豊葦原の千秋の長五百秋の瑞穂の國は、わが子正勝吾勝勝速日天忍穗耳の命の治むべき國である」

と仰せられ、直に天忍穗耳の命をお呼び出しになつて、此の日本即ち瑞穂の國に下るやうにお命じなさいました。

天忍穗耳の命は、

「承知いたしました」

とお答へ申上げ、それから、瑞穂の國の様子を見るために、天浮橋の上に立たれま

した。遙に見下す下界の島々は、誠に美しい姿に泛んでおりましたが、島には何となく騒がしい空氣がたゞよつておりました。天忍穗耳の命はおどろいて立歸り、

「豊葦原の瑞穂の國には、わるい神が大ぶるらしく、ざわ／＼と騒いでをります」

と天照大神に申上げました。

安の河原 此のことをお聴きになると、天照大神は御高産巢日の神と御相談な  
の神集へ され、天の安の河原に八百萬の神々をお集めになりました。そこに

は美しい日が照つて、河原の石どもは、瑠璃の玉のやうに光り輝いてをりました。天照大神は、八百萬の神々たちに向つて、

「豊葦原の中つ國は、わが子孫の治むべき國であるのに、わるい神々が群つてゐるといふことだ。これは一體どうしたことであらう。さつそくこれを平げなくて



はならないが、誰を差向けたらよからうか、思ふところを遠慮なく申して見なさい」

とご相談になりました。

八百萬の神々は、いろ／＼にお考へになりました。が、どの神さまからも何とも申し出ませんでした。その時、思兼の神が進んで、

「それは、天の菩比の神をお遣はしになるのが一ばん宜しうございませう」と申し上げました。他の神様がたも、

「それが宜しうございます」

と賛成いたしました。

そこで天照大神は、天の菩比の神にお命じになつて、此の國へ降されました。

天の菩比の神は、中つ國のわるい神々を平げようとして、出雲の國へお出でになりましたが、大國主の神に取り入つてしまつて、三年たつても天高原へは何のたよ

りもいたしません。もちろん、わるい神々を平げるなどといふことは、忘れてしまひました。

### 再度の

高天原では、天の菩比の神が、いくら待つても歸つてまわりませんか

### お使ひ

ら、再び天の安の河原に八百萬の神々のお集へがありました。そこで

天照大神は、

「三年前に葦原中つ國にやつた菩比の神は、どこに何をしてゐるのか未だに一言の返事もない。此のまゝ捨て、置くことは出来ないから、もう一度他のものを遣はさうと思ふが、誰れがよからう」

とお尋ねになりました。

思兼の神は知恵の勝れた神様でした。今度も大神のお言葉をきくと進み出て、

「それは、天津國玉の神の子の、天の若日子をお遣はしなさるがよろしいでせう」

と申上げました。他の神々もみな賛成でしたから、大神もそれにお定めなさいました。

天照大神は、天の若日子をお召しになつて、それに天の波士弓と天の加久矢といふ弓矢をお授けになり、この中津國に差向けられました。

天の若日子も大神の御命令によつて勇ましく下界へお降りになりましたが、これもどうしたことが出雲の國に止つたまゝ、大國主の神のお娘である下照姫と申すお方を妻にして、そこに居つき、そればかりか、自分で出雲の國を奪つてしまはうといふ野心を起しました。ですから、とうとう高天原へは一言の返事も申上げないで八年の長い年月を過してしまひました。

そこで、高天原では天照大神と高産巢日たかみむすびの神とが御心配なされて、三たび八百萬の神々をお集めになりました。さうして、

「天の若日子も中津國に行つたまゝ未だに返事をして來ない。何でさうしてゐる

か尋ねさせたいが、此の使には誰れをやつたものであらう」とお尋ねになりました。

今度も思兼の神を初めとして、他の多くの神々が、

「それは、雉の鳴女をお遣しになるのが一番よろしいでせう」とお答へいたしました。

大神は直ぐその雉をお召しになりました。

「雉よ、お前はこれから下界へ飛んで行つておくれ。さうして、あの、天の若日子に逢つて、かう云つてくれ。『お前を葦原の中つ國にやつたのは、よくない神どもを平げるためであつたのだ。それなのに、降つて八年にもなるのになせ返事もしないでゐるのか』と。よろしいか」

雉の鳴女はよくそれを聞いて、

と答へたまへ、下界をさして矢のやうに飛んで行きました。

天の若日子の住んでゐたお家の前に、こんもりと茂つた湯津楓といふ木がありました。雉はその木の梢に止つて、大神から仰付かつたことを語りました。

「天の若日子よ、私は高天原から天照大神の御命令でまゐつたのだよ。何故お前は八年といふ長い間、一言の御返事もしないで此の國に止つてゐるのだ。お前は此の國に荒ぶる神たちを平げる爲めに、差向けられた筈ではないか」

と云つて細かに物語りましたのを、天の佐具賣といふ若日子の侍女がきゝつけました。佐具賣はそれをきいて顔をしかめながら、

「おゝ、何といふあの鳥はいやな鳴き聲を立てるのでせう。あんな鳥は、一そ射殺してしまはれるがよいでせう」

と天の若日子にお勧めしました。

天の若日子は、そこで、大神から頂いてきた天の波士弓と天の加久矢とを取出し

ウンと引いてその矢を放ちました。その矢は過たず楓の梢にゐた雉を射殺してしまひました。そればかりでなく、矢は勢ひがあまつて高天原の方へ飛上つて行つて、天の安の河原に落ちました。と、丁度そこには天照大神や高御産巢日の神（或は高木神とも申上ます）もお出になつて、その御前に矢が落ちたのでした。

高木の神は、

「オヤ？」

といつてその矢をお拾ひになりました。矢の羽には生々しい血がべつとりとついて居りました。高木の神はふしぎさうにそれを御覽なされて居りましたが、

「ごうもをかしい。此の矢は天の若日子にやつた矢ではなかつたらうか」

とおつしやつて、他の神々にもお示しになりました。神様方もそれを御覽になつて、

「それに相違ありません、或は天の若日子がわるい神々と戦つてゐるのではないでせうか」

「それとも、若日子が悪い心而起して亂暴を働いてゐるのかも分りません」  
など、色々のことを申しました。

高木の神は、「よし」と云つて、

「若し、天の若日子がわるい神々を射た矢であるならば、天の若日子にあたつてはくれるな。また天の若日子がよくない心而起して射た矢なら、彼の胸にあたつてしまへ」

とおつしやつて、今矢の通りぬけて來た路から下界へさつと射返されました。

矢は稻妻のやうに鋭く飛んで行つて、天の若日子の家に落ちました。その時、一度若日子は兩足をくんだまゝ、仰向いて寝てゐましたが、「あッ」といふまにひろげた胸の眞只中に矢が立ちました。天の若日子は二言といふことも出來ずに死んでしまひました。

それを見た下照姫は大そう悲しみました。

天の若日子の屍の枕べに倒れて、思ふ存分に泣き號びました。そのお泣きになる聲が、遠く高天原にまで聞えてまゐりました。

その泣く聲をきいた天の若日子の兩親は、驚いて高天原から降りてまゐりました。けれども、若日子はもう冷たいむくろになつてゐましたから、これも悲しさのあまり、若日子の死骸に縫つて泣き悲しみました。

此の人たちは、涙の中に若日子の喪屋をつくり、そこで河雁を供物の係とし、鶯を箒持にし、翠鳥を料理人とし、雀を米つき女とし、雉を泣き女として、八日と八夜大騒ぎをして、若日子の後を弔ひました。

此のころ下照姫のお兄様で、阿遲志貴高日子根の神といふひどく天の若日子に似てゐる神様がありました。若日子の死なれたのをお聞きになつて、それをお弔ひする爲めにまゐりました。高天原からお降りになつてゐられた若日子のお父様お母様は、それを見ると、全く天の若日子に違ひないと思ひ込んでしまひました。で、大

そう喜んでしまひ、

「おゝ、私の子はまだ死なずにゐてくれたのか」

「まあ、お前はまだ生きてゐてくれましたか」と云つて、高日子根の神の手や足にまとひついて、嬉し涙を流して泣きました。

阿遲志貴高日子根の神は、さうされると苛く憤り出してしまひました。

「これは何をいふのだ。私は若日子が仲よしの友だから、お葬ひにきてあげたのだ。それなのに、私を穢れた死人にたとへるとは何だ」

といつて、お腰にさゝれた大刀——大量とも神度の劔とも申した劔をひき抜かれてその喪屋を切り倒し、それを足で蹴散らかしておしまひになりました。さうして、高日子根の神は、そのまゝ眞赤なお顔をして、どことなく立去つてしまひました。

これは、美濃の國の藍見河の河上にある、喪山といふ山だと申します。

さて、阿遲志貴高日子根の神が立去られた後で、妹の下照姫は、「あの方は私のお

兄様です」といふことを知らせる爲めに、こんな歌をおうたひなさいました。

天においでる

棚機ひめの

お頸に

かけてゐらつしやる

つらねたみ珠よ

穴玉よ

谷から谷へ

その玉のやうに輝きわたる

その神さまは

あじしき高日子根の神ですぞ

この歌によつて、あれが高日子根の神であつたといふことが、誰れにもよく分り

ました。

出雲 高天原では、又も安の河原で御相談がありました。もう天の若日子も  
平定 あんなことになつたのですから、今度はたれを中津國にやつたらよか

らうかと、八百萬の神々におたづねになりました。

此の時、思兼の神をはじめ、多くの神様がたは、

「それは、此の川（天の安河）の河上に住んでゐる伊都の尾羽張の神になさるが  
よいでせう。若し此の神でなければ、その子の建御雷之男の神でもよいでせう」  
と申しあげました。しかし、伊都の尾羽張の神は、天の安の河上の大きな石屋の中  
に住んでゐられて、天の安の河水を逆さにせきとめ、道を塞いでゐる神でしたから、  
普通のものでは此の神に逢ひに行くことさへ六ヶしいのでした。ですから、

「それでは、誰れを使ひにやつたらよからう」

と大神は御相談をかけられました。すると、皆が、

「それは、天の迦久の神をやられたのが一ばん宜しいのです」

と申されました。

そこで、大神は天の迦久の神を、川上の石屋へやつて、伊都の尾羽張の神にその  
ことを申させました。尾羽張の神はその仰せを承はつて、

「それは、恐れ多いことですが、そのお使には、私よりも、私の子の建  
御雷の神をお差向けになる方が宜しうございます」  
と申しあげました。

大神はそれをお聴きいれになり、改めて天の鳥船の神を建御雷の神にさし添へて  
葦原の中津國に向はせることにいたしました。

二柱の神は、はる／＼遠く出雲の國に急がれて、伊那佐の濱までお降りになりま  
した。そこには大國主の神がいらつしやいました。二柱の神は、そこで十拳の劔を

抜き放ち、白い花咲く波のうねりの上に突き立て、その劔の前にとつかりと坐つて、大國主の神にかう申されました。

「私たちは、天照大神と高木の神の御命令を受けて、高天原から來たものです。大神さまの申されるには、あなたの治めていらつしやる葦原の中津國は、大神の御子の長くお治めなさるべき筈の國であると仰有られるのです。あなたは何と心得てをられますか」

すると、大國主の神は謹んで、

「その事なれば、私一人では御返事も申し上げられません。私の子の八重事代主の神が居れば、何とか申しあげられるのですが、あひにく、漁をする爲めに御大の岬へ行つて、未だ歸つてまありません」と申されました。

そこで、建御雷の神は、天の鳥船の神に申しつけて、八重事代主の神をお召しに

なりました。さうして、

「お前はごう思ふか」

とおたづねになりました。

事代主の神は、それをお聴きになると、お父様の大國主の神に向はれて、

「これは恐れ多いことであります。此の國はみんな大神の御子さまにお譲り申しあげたが宜しうございませう」

と云つて、乗つて來られたお船をぐいと傾けると、ほん／＼お手をたゝかれながら青垣のやうな波の間に、おかくれになつてしまはれました。

それを見た二柱の神は、改めて大國主の神に向はれて、

「今、あなたの子、事代主の神は、あのやうに申したが、他に不服をいふものはありませんか」

と聞かれました。すると大國主の神は、

「他にはとやかく申すものもありませんが、たゞ一人、建御名方の神と申すものがございます」

と答へましたが、その時、早くもその建御名方の神が歸つて來られ、此の有様をお知りになりました。

建御名方の神は、元もと力のお強い神さまでしたから、此の様子を見ると、千引の大岩をひよいと両手にさし上げて、軽々とそれを持つたまゝやつていらつしやいました。さうして、天地もわれるやうな大聲を出して、

「誰れだ。この國へ來てひそ／＼話をしてゐるのは？ 用があるなら、出てきておれと力競べをするがよい。先づおれが貴様の手をひねりあげてくれるぞ」

と叫びながら、手にしてゐた大岩をどしりとそこへ投げ出して、建御雷の神につか／＼と近寄り、その手をむづと掴みあげました。

つかんで見て、建御名方の神はおどろきました。建御雷の神の腕は、忽ち氷の柱

になつてしまつたのです。けれども、利かぬ氣の建御名方の神ですから、「何が」とお考へになつて一層力をいれますと、建御雷の腕が今度は恐ろしい劔の刃に變つてしまひました。これには、さすがに建御名方の神もびつくりしてしまひ、お手をはなして後ごみしました。

建御雷の神はおだやかに、

「どれ、それでは、今度はお前の手を握らせてもらはうか」

と云つて、建御名方の神の手を取られますと、その手は丁度若い草の芽でもつかんだやうに、一堪りもなく握りつぶされてしまひました。

建御名方の神は、本當にびつくりしてしまひました。まつ青になつて、これでは叶はないと思ひましたから、急いで後ろを振向くと、どん／＼其處を逃出してしまひました。建御雷の神は、それを見ると「此奴、逃すものか」とばかり後からどん／＼追つかけてまゐりました。



建御名方の神は、一生けんめいに逃出して、とう／＼信濃の國の洲羽の海（諏訪湖）まで落ちて來ました。が、とう／＼爰に追ひつめられてしまひました。建御雷の神は、その大力で建御名方の神の首すじを掴み、その場でひねり殺さうとしました。すると建御名方の神は苦しい聲を出して、

「御免下さい。恐入りました。どうかお願ひですから生命だけはお赦して下さい。もう私は此の湖のほとりから一足も外へは出ませんから。また此の國は父や兄の申すとほり、大神の御子さまに差上げて少しも異存はございませんから……」と云つて降参いたしました。

そこで、建御雷の神もそれをお許しになり、自分は出雲の國に凱旋なさいました。さうして、大國主の神に向はれて、

「あなたのお子さんである事代主の神も、建御名方の神も、みんな天神の仰せどほり此の國を奉るに異存ないと申すのですが、それでよいでせうか」

とおたづねになりました。大國主の神もかしこまつて、

「子供たちが左様に申します上は、元より私に異存はございません。此の葦原の中つ國は、大神の仰せどほりきれいに差上げます。が、たゞ一つお願ひがあります。といふのは、どうか私のために一つの住家を建て、いたゞきたうございます。天神の御子さまが天神をお祀り遊ばすやうに、しつかりと大磐の上に太い柱をたて、大空高く棟木をわたして、私の住家をお造り下さいますなら、私はたとへ遠い／＼國のいや果てに居りましても、きつと大神のお末をお護りいたしませう。また、わが子百八十人の神々も、八重事代主の神がお仕へしたにもまして。よくお仕へするでせう」

とお答へいたしました。建御雷の神もそのことは承知いたしましたので、大國主の神はすぐおかくれになりました。

かうして、國ゆづりのことは、おだやかに済みました。

出雲 ところで、大國主の神のお望みになられた通り、出雲の國の多藝志の小  
大社 濱といふところに、望まれたやうな立派なお社が造られて、そこに大  
國主の神は祀られました。今もそのまゝ世間の尊崇を受けられてゐる出雲大社がそ  
れであります。

此のお社が出来ると、水戸の神のお孫であらせられる櫛八玉の神が、その膳夫と  
なつて、種々の御供物を差上げながら、そのお祀りをなさいました。

それから櫛八玉の神さまは、御自分で鶉の鳥に化けて水を潜り、海の底に沈んで  
行つては泥土を啣へて浮び上り、その土で天の八十毘良迦といふ多くの土器を造り  
ました。又、海藻の莖をきりとつて拵へた燧石と、海藻の莖でこしらへた燧杵とで  
火をきり出し、さて申されるには、

「今私がきり出した火によつて、高天原では神産巢日の神のゐらつしやる御殿の

凝烟のやうに、八度も拳める長い凝烟のたれ下るまで焚きあげ、かまごの土の下  
は、底の岩根の下の下まで焼き固まるまで焼きつゞけて、さうして、長い、長い、梶  
繩の千尋もあるのをひきのばして釣をしてゐる漁夫たちが、大きな尾鱈の鱈をさ  
わくと音立て、釣りあげたのを、青竹を割つた机の上に盛りあげて、その竹の  
とをくと撓むほどに立派な御料理をしてさしあげます」  
と申しました。

かうして、出雲の大社は、今日までその立派な御社殿を多藝志の小濱に聳かして  
居るのです。

大社 今こゝで、大社詣でのことを少しばかりお話して置きませう。我々日  
詣で 本人は、一度はせひとも伊勢の大神宮にお詣りしなくてはならないや  
うに、出雲の大社にも必ず参拝したいものです。

出雲大社は大社驛から凡そ十五町ばかりのところにあります。お社は遠く神代の折に建てられたものですから、今日まで他の神社とはその建て方をすつかり別にしてゐます。先づ驛に下りてから宇迦橋を渡り、大鳥居をくゞつて坂路を上ると、そこに第二の鳥居があります。そこから愈々賽路になるのです。賽路の左右には、老松が長く路をはさんで、參拜の人の心を淨くしてくれます。路の中ほどに、祓橋があり、そこを進むと、碧銅の大鳥居があつて、そこからお社の境内になるのであります。

社の境内は荒垣で四面をかこまれてゐます。中に拜殿を初め神饌所・齋火殿・觀祭樓其他が並び、八足門の内に瑞垣と玉垣とが二重に區切られた中に、官幣大社である出雲大社の本殿があります。此の本殿こそが天日隅宮で、その建て方が、他の神社の社殿と全くちがつてゐるのです。私たちは、たゞ大國主の神の御前に御拜をするばかりでなく、大出雲の舊い文化の片はしを、このお社の建築から究めることも

出来るのです。

大國主の神は、普通にゑびす様とも申されてゐます。さうして、そのお子様の事代主の神は大黒様だといはれます。

「ゑびす大黒いづもの國の西と東のまもり神」

といふ唄のあるやうに、大黒さま即ち八重事代主の神をお祀りしたお宮は、美保の關港の近くにある美保神社です。

山陰線の米子から境の港まで支線を行き、そこから美保の關まで汽船に乗ればすぐ美保の港です。町の西南海岸にはつきり眼につく鳥居こそが、なつかしい國幣中社美保神社で、事代主の神とその妃美保津姫命をお祀りしてあるのです。

此の外、出雲をめぐる旅には、數多い神代史の蹟を偲ぶことが出来ませう。八東郡の熊野村にある熊野神社(國幣中社)は須佐之男の命をお祀りした社であり、飯石郡の東須佐村の須佐神社(國幣小社)も須佐之男の命と稻田姫命をお祀りした社です。大原郡

の海潮村須賀の須賀神社は、尊が「わが心すがすがし」と宣はれて八重垣つくられた土地だといはれ、簸川郡の日御碕村の日御碕神社は、出雲の古社の一つとして有名であります。こゝら一帯の濱が昔の伊那佐の濱で、建御雷の神が大國主の神に國ゆづりのことを話合つたところで、大社から日御碕はすぐのところですよ。

出雲めぐりの旅は、わが建國の歴史を知る——心に泌みて知る上に極く意味の深い旅であります。一度は私たちも必ずおまわりに出たいものです。

## 七、高千穂の峯

天孫——さて、建御雷の神は、葦原の中津國もすつかり平定しましたので、勇降臨——みたつて高天原に凱旋してまゐりました。さうして天照大神に細かく

中津國のことをお知らせ申しあげました。

そこで、天照大神は高木の神などと共に、正勝吾勝勝速日天忍穗耳の命をお呼出しになり、

「只今、建御雷の神が葦原の中つ國を打平げて還つてまゐつた。ついでには、前々言ひつけたやうに、お前はこれから中つ國に降つて行つて、あの國を治めてもらひたいが、差支へはあるまいね」

とおつしやいました。天忍穗耳の命が申しますには、

「その事なれば、私がかねてから其の心で居りましたから、少しも異存はござい

ません。けれども、だん／＼出發が延びてまゐりますうちに、私に一人の子供が  
生れました。天邇岐志國邇岐志天津日高日子番の邇々藝の命と申しますが、只今  
となりましては、却つて私よりも此の子の方がよいやうに思はれます……」  
とお答へいたしました。此の御子さまは、もう一つのお名を天津彦火瓊々杵尊と  
も申上げ、高木の神の御娘の萬幡豊秋津比賣をお母様としてお生れになつたのでし  
た。大神はこれをお聞き入れになりまして、瓊々杵の尊をお降しになることに定め  
ました。

そこで、瓊々杵の尊がお呼出しになりました。大神は先づ尊に三種の貴いお寶を  
賜はりました。それは八坂瓊の曲玉と八咫の鏡・天叢雲の劔（後に草薙の劔）で、  
後の世永く三種の神器と申し、皇位の御印として皇室にお傳へなされるものであり  
ます。大神は特に御鏡を指して「此の鏡を私だと思ひなさい」と仰有いました。そ  
れから大神は瓊々杵の尊のお供として、次の五柱の神さまをお添へになりました。

中臣氏の遠い先祖にあたる天兒屋命。

忌部氏の遠い先祖にあたる太玉の命。

猿女氏の遠い先祖にあたる天鈿女の命。

鏡作りの遠い先祖である石凝姥の命。

玉作りの遠い先祖である玉屋の命です。

これ等の神々は、それ／＼一族のものたちを召し連れて、天孫の御降臨にお供を  
することになりました。

建國の ところで、天照大神は、天孫瓊々杵の尊に仰せられますには、

大詔 「葦原の千五百秋の瑞穂國は、これ吾が子孫の君たるべき地である。

皇孫よ、お前はこれから行つてよく治めるが宜しい。寶祚の隆えて行くことは、  
天地と同じやうに窮りないであらう」

と大みことのを下されました。

瓊々杵の尊は十分に用意が出来ましたので、いよ／＼御出發にならうとなさいますと、空の路のいくつにも岐れる辻のところ立つてゐて、上は高天原を照し、下は葦原の中つ國まで照してゐる神様がりました。先駈の神がびつくりして駈け戻り、このことを瓊々杵の尊に申しあげました。

「それは誠にをかきな神です。その鼻の長さは七咫。その背は七尺、口と尻とが照り輝いて、眼は八咫の鏡のやうにまぶしいのです」

と申しますので、大せいの神様がたも、ふしぎに思はれましたが、誰れもその神の前に立つて尋ねるものがありません。

そこで天つ神は、天鈿女の命をお呼びになりました、

「お前は、かよいわい女の神でありながら、ごんな凄まじい神に對つても、決してびく／＼しない、勇氣のある神であるから、あれへ行つてよく尋ねて見なさい」



皇孫

八百萬神々を引具して降臨し給ふ

とお命じになりました。

天鈿女の命は女神さまでも仲々の豪膽ものでしたから、天つ神のお言ひつけごほり、一人でづか／＼と怪しい神の前へ出て行かれました。そこで前をひろげてお乳を露はされ、裳帯をお臍の下までお垂らしになつて、その神の前に立つてげら／＼とお笑ひになりました。

すると、その神も笑ひ出して、

「お前は、なせそんなことをするのだ」

と尋ねました。鈿女の神は、

「それよりも、今、天孫が幸せられる矢先に立ち、お路筋に立塞がつてゐるお前は、一體何者です」

と反問されました。その神は、

「私は猿田彦大神である。天孫が降臨されるといふことを伺つて、わざ／＼此處

にお迎へして居るものである」

と申されました。

天の鈿女の命は、重ねてお尋ねになりました。

「それでは、お前が先にたつて行くか。それとも、こちらで先きに立たうか」

すると、猿田彦の神は、

「私が先に立つて、御案内をいたませう」

と申しました。鈿女の命は、

「では、お前はどこまで行き、天孫をどこへ案内しようとするのか」

と重ねて尋ねますと、

「天孫は日向の高千穂、樓觸の峯に向はれるが宜しい。私は伊勢の狭長田の五十鈴の川上にまゐりませう」

と云つて、更に言葉をつゞけ、

「お前は、私を第一に知つたものであるから、私の行くところまで一緒に来ていただきたい」

と申しました。

天の鈿女の命は、その通りを天つ神に申しあげました。

天つ神もそれをおきよになつてご安心なされました。そこで愈々瓊々杵の尊は、此の國にお降りあそばすことになりました。

お供をされたのは、前に申しました五柱の神々さまの外に、思兼の神もをりました。手力男の神さまもをりました。天の石門別の神さまもをりました。その他たくさんのお供が、それはお供をして、それはよく勇ましいお旅立でありました。

### 高千穂の宮に

いよ／＼瓊々杵の命は、高天原の高御座をお立ちになり、大空かけてたなびく八重の雲路をかきわけながら、勇ましくも下界をさしてお進

みなさる御様子といつたら、實に勇ましいものでありました。

猿田彦の神は、そのお先拂ひをして、天の浮橋をわたり、それから筑紫の國にある日向の高千穂の峯へと、お行列は長く／＼つゞきました。天の忍日の命と天津久米の命とが、そのお行列に先頭をきりました。二柱の神様は、天の石鞞といふ矢壺を負ひ、左の腰には頭推の太刀をつるして、天の波士弓をしつかり小脇にかい込み天の眞鹿兒矢を指股にたばさんだ有様は、勇氣凛々としたものでした。二神の此の勇氣は永くその子孫に傳はつて、天の忍日の命の裔は大伴の連、天津久米の命の後は久米の直となつて、共に皇室を護る軍人の祖先となりました。大伴久米兩氏のことは、他の機會にお話しいたします。

かうしてお行列が笠沙の御前までいらつしやいました時、

「あゝ、こゝはよい處だ。朝日はまともに輝き、夕日は赤々と照る——ほんたうによい國だ」



とおつしやつて、大地に深く宮柱を建て、棟木を高く空に聳えさせた御殿を造られて、その中にお住ひなさいました。

それから、天の鈿女の命をお召しになつて、

「お先拂ひをしてくれた猿田彦の神は、お前が見あらはしたのだから、その行くところまでお送りするがよい——それと、お前も此のことを永くわすれない爲めに、あの神の名をとつてゆくやうにしなさい」

と申されました。それから、天の鈿女の命の一族を、猿女の君と呼ぶやうになりました。

その後、猿田彦の神は伊勢の國阿邪訶といふところにお住ひなされましたが、或る日のこと、漁りの爲めに磯へに出て行かれました。すると、どうした機みにか比良夫貝といふ貝に手を喰ひあはされ、そのまゝ海中深く溺れてしまひました、その溺れて沈まれる時、どくどくと、海のそこ深く入りますと、そこからつぶくと泡

沫がたち、その泡がくるくると踊るやうにめぐつてさくく消えたと申します。

物言は さて、天の鈿女の神は、猿田彦の神をお送り申してから、海へに出て

ぬ海鼠 すべての魚ごもを呼び集めました。岩のかげから、波の末から、大きな魚や小さな魚まで、みんな泳ぎよつてまゐりました。本當に海の水の色の變るほどたくさん群つてまゐりました。その時鈿女の神さまは、

「こんど、この中つ國へは天神のお孫様が御降臨なされたが、どうだ、お前たちはおとなしくお仕へするであらうな」とおたづねになりました。

すると、多くの魚ごもは、大へんに喜びながら、みんな鱗をそろへて、

「あい〜、きつとお仕へいたします」

とお答へいたしました。たゞ其の中で、海鼠ばかりがつんぼのやうに平氣で、おし

のやうに押しだまつて、一言もものを申しません。鈿女の神が、

「海鼠や、お前はどう思ふのか」

とおたづねになつても、

「……………」

海鼠は何とも申しません。鈿女の神は憤つて、

「この口は、ちつともものを言はぬ口か」

といつて、紐のついた小さな刀をぬいて、その口を斜にすつとお切りになりました。それからといふもの、海鼠の口はさけたのだと言ひ傳へられてゐます。

それから後は、長いあひだ、年々志摩の國から、鮑や海鼠や海のもの奉るやうになりましたが、その度に猿女の君にもお下しなされる例になりました。

## 八、伊勢の宮居

かたじけなさに何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ  
なさに  
西行法師

といふ歌は、西行法師が伊勢の大神宮にお詣りした折に、自分の本たうの氣もちをそのまゝ詠んだ有名な歌ですが、これは西行ばかりでなく、日本人の誰れでもが感ずる氣もちに違ひありません。伊勢の大神宮さまは、時代からいへば今までのお話（神代）からよほど後の世になつて祀られたお宮ですが、こゝでお話するのが適當だと思はれますから、これから暫らくその方へ入つて見ませう。

三種の神器  
御鏡と、御劔と曲玉、三種の神器については、天孫降臨のところでお話をいたしました。天照大神が瓊々杵の尊にお手づから下し賜はつた

此の神器は、わが萬世一系の皇位を繼がせられる天子様に、連綿としてお傳はりになつて居るのであります。

神武天皇さまから代々の天皇さまは、いづれも三種の神器を御手許に奉安し、これをお祭りすることを怠りませんでした。此の「まつる」といふことは、昔は直ちに又た國の政治であつたのでした。「まつりごと」が政治であると、今も日本の國語に残つてゐるのを見ても知られます。北畠親房卿の書かれた『神皇正統記』の中には、次ぎのやうに記されてあります。

鏡は一物を蓄へず、私の心なくして、萬象を照すに、是非善惡の姿現れすと云ふ事なし。その姿に従ひて、感應するを徳とす、これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を徳とす。智惠の本源なり。この三徳をあはせ受けずして、天下の治んこと、誠に難かるべし。〔神皇正統記〕卷之一  
と云はれてゐますが、誠にその通りで、三種の神器は、畏くも天照大神が國を治め

たまふ「まつりごと」の大精神として皇孫にお示し下さいましたものであります。代々の天皇さまは、いづれも此の三種の神器をお承けになられたのみでなく、神器の御徳を徳とせられ、萬民をお慈しみ下さいまして、萬世一系の皇位はいや榮えに榮えさせられたのであります。

### 倭の笠

#### 縫邑へ

代々の天皇さまは、いづれも其の御殿(皇居)に三種の神器を奉安いたしました。もちろん、この上もなく貴い御寶でありますから、皇室におかせられても、最も大切に扱はれましたが、だん／＼世が遷るにつれて、その扱ひが變つてまゐりました。

神武天皇から十代目の天皇さまを崇神天皇と申し上げます。この天皇さまは、このやうに尊い神器を皇居において、萬一不敬なことでもあつては申譯のないことだとお考へになりました。そこで、その六年(紀元五六九)に、八咫鏡と天叢雲の劍とを

御殿に近い倭の國の笠縫邑にお祀りし、皇女豐鍬入姫の命を之にお仕へさせること  
といたしました。これが皇居と神宮の別になられた最初であります。そこで、皇居  
の方へは、別に御鏡と御劔とを造らせられ、それに曲玉を加へた三種の神器を、代  
々の天皇様にお傳へして、皇位の御印となされました。その時、御鏡と御劔は神代  
の昔八咫の鏡を造られた石凝姥の命の御子孫と、鍛冶の大先祖である天目一箇神の  
御子孫とに仰せ下されて、お造りになられたと申します。

伊勢の 次(つぎ)の天皇は第十一代の垂仁天皇であられました。天皇は、皇女倭姫の

内宮 命を、御杖代として大神にお仕へさせることにいたしました。

いふまでもなく、御鏡は天照大神が天孫瓊々杵の命にお下し賜はるとき、「此の寶  
鏡を見ることまさに我を視るが如くすべし」と仰せられましたとほり、天照大神と  
して仰ぐべきものであります。で、倭姫の命は、大神を鎮座し奉るべき地を、諸國

をめぐつて此處か彼處かとお探しになりました。さうして、たうとう東の方大和の  
國から淡海(近江)の國、美濃の國をお過ぎになつて、神風の伊勢の國へとお入り  
になりました。その時、命はたま〜天照大神のお告げを受けたのであります。そ  
の神誨には、

「この、神風の伊勢の國は、即ち、常世の浪、重浪のよる國である。傍國のうま  
し國である。この國に居らうと欲ふぞ」とありました。

倭姫の命は、この貴いお告げを畏んで、御鎮座の地を伊勢の國の度會郡宇治、五  
十鈴の川上にある神路山の麓にお定めになり、こゝに大宮柱をふとしき立て、齋き  
まつることにいたしました。これが、垂仁天皇さまの二十六年で、それから昭和八  
年まで千九百三十五年、その長い〜間、神宮は些かのゆるみもなく、わが日本の本  
の守り神として、國民上下尊敬の的となつて居られます。

これが、内宮の起りであります。今、これを一目にわかるやうに記してみますと、

|      |                |
|------|----------------|
| 皇大神宮 |                |
| 所在   | 伊勢國宇治山田市 五十鈴川上 |
| 祭神   | 天照大神           |
| 御神體  | 八咫鏡            |
| 相殿   | 東座 手力男神        |
|      | 西座 豊秋津姫命       |

御鏡を御神體ごしんたいとせられて居ることは申すまでもありませんが、その時お祀りなされた御劔のことは、後に熱田神宮あつたじんぐうのところでお話することにいたします。

伊勢いせの外宮けぐうの伊勢の神宮と申しますのは、内宮と外宮の兩方のお宮にわかれてゐます。内宮については前にお話したとおりであります。これから外宮のことをお話いたします。外宮さまは、豊受大神宮とようけだいじんぐうと申す方が正しいので、所在地その他は、次のやうであります。

|       |                     |
|-------|---------------------|
| 豊受大神宮 |                     |
| 所在    | 伊勢國宇治山田市 山田原        |
| 祭神    | 豊受大神                |
| 相殿    | 御伴神 瀛津島姫命、瑞津姫命、田心姫命 |

となつてをります。

豊受大神は、伊邪那岐・伊邪那美二神の御子さまであるとも云ひ、御孫さまであつ

たとも申されます。そのお名前も、豊宇氣毘賣神・保食神・大氣津比賣神・御饌神・大御膳都神・和加宇加乃賣命・倉稻魂命・宇賀神・屋船豊宇氣姫命などと、たくさん申されてをります。

こんなにも多くのお名前のあることは、いづれも此の大神に有り難い御神徳のあられたこととお稱へ申上げるからのものであります。さうして、そのお名前が、いづれも御膳のもの、即ち食物に關係したものから出て居られるのを見ても、豊受大神は、明かに食物の神さまであることは申すまでもありません。上古、須佐之男の命が高天原を追はれましたとき、大氣津比賣の神に食べものを求められると、姫神が鼻や口から食物を取出されたので、憤つて之を斬られたといふことを前に述べました。その姫神の御身體から、種々の作物の出来たこと、即ち頭から蠶、目から稻、耳には粟、鼻には小豆、その他麥や大豆のやうなもの、出来たことも其の時に話しました。結局この神様は五穀の神・農業の神でありました。神産巢日の神は此の種

子をとつて農業の道を我々の先祖に教へられたのであります。

かやうに有りがたい神様でありましたから、天照大神は瓊々杵の命を此の國にお降しなされる時、豊受大神の御魂をも添へられたのであります。それは、天照大神が國民のために産業の大本をおたてになる深い思召から出られて居ることでありませう。これが、わが建國の一つの理想となつて、歴代の天皇さまは、いづれも「農は國の大本」であることをお示しになられ、百姓を大御寶としてお慈しみなされたことは、比類なき我が日本の特色であります。

さて、豊受大神の御神靈は、これも天孫御降臨後、代々、三種の神器と共に皇居の中に奉安されておりましたが、八咫の御鏡を笠縫邑にお移しなされる時、此の神様は丹波の國比治の眞名井原といふところにお祀りすることになりました。今、山陰線の福知山から、酒吞童子の傳説で名高い大江山へ行く途中にある元伊勢がそれで、社殿の作り方も神宮に似て居り、宮川・五十鈴川・宇治橋・天の岩戸などとい

ふお名も残つてゐるのです。

かうしてゐる間に、丁度二十一代雄略天皇さまの二十一年（紀元一一三七年）十月一日の日に、天皇の御夢枕に、天照大神がお立ちになられ、

「吾は、高天原から見定めた大宮地に鎮まつてをるが、吾のみでは甚だ苦しい。

大御饌も心安く聞しめさすにある故、丹波の眞名井に鎮まります吾が大御饌津神豊受大神をわが許へ遷されるやうに」

と仰せられました。

天皇はこの御夢告を長いことに承り、伊勢の國渡會氏の先祖である大佐々命に命令じになつて、眞名井原から伊勢の山田原にお迎へいたしました。さうして皇大神の御饌津神としてお祀りしたのであります。それが天皇の二十二年九月だと申しますから、内宮の奉祀から四百八十一年後のことでもあります。

かうして、内宮と外宮とが奉祀されましたから、わが皇室におかせられては勿論

全國民は深く伊勢神宮を尊信し、これを措いて他に勝る神も佛も無いことがわかるやうになりました。ですから、天竺の佛教が入つて来て、お坊さんたちが汗水流して佛の教を説き、佛様の尊いことをお話しても、日本人にはどうしても思ふやうに信せられませんので、失禮なお話ですが、「神様と佛様とは二つではない。佛さまは日本の神様の本家だ。即ち天照大神は印度の大日如來が假にお姿を現はしたものだから、天照大神を貴ぶものは當然大日如來を信じなくてはならない」などと教へるやうになつたのでした。愚かな話ですが、さうしなければ日本人は佛様を振向きもしなかつたほど、神さま——特に伊勢神宮の信仰は強かつたのであります。

お伊勢

ですから、此の尊いお宮にお詣りをしようとするものは、交通の不便

まゐり

な昔にも大そう多かつたのであります。「伊勢講」といふ講中（仲間）

の人たちが、お互に金を出し合つて其の旅費を貯蓄し、それを持つて遙ばる神風の

伊勢路へ志すことは、文祿の時分から出来てゐたものであります。

尤も、此のお伊勢詣りの一ばん盛んであつたのは、江戸時代に入つてからのことであります。たくさんの老若男女が、白い衣を身につけて、群るやうにして伊勢へ／＼と行くことは、江戸の中ごろになつて一番盛んであつたやうです。古い記録を見ると、寶永二年（東山天皇、將軍綱吉）の四月から五月に亘る五十日餘の間に、お伊勢まゐりは三百六十二萬人、明和八年（後櫻町天皇、將軍家治）には四月から八月にかけて二百七萬餘人のお詣りがあつたと申しますから、實に盛んなもので、當時の伊勢街道は、押すな／＼の行列を作つてゐたと傳へられてゐます。

かうして明治時代に入りますと、新らしく參宮鐵道まで布かれて、お參詣には愈々都合がよくなりましたから、日本國民は尠くも一生に一度は必ずお詣りしなくてはならないものとして出かけるやうになりました。その賑やかなことは申すまでもないことであります。

### 熱田の熱

#### 熱田神宮

伊勢神宮のことはこれ位にして、次には熱田神宮について一言お話をして置ませう。東海道線の名古屋に近く、熱田といふ停車場があります。驛から僅か五町（五五〇米）の所に、名高い熱田神宮はあります。

熱田神宮は劔の宮——即ち草薙の劔を奉祀せられたお宮であることは、誰れもよく承知して居るところです。

伊勢神宮には御鏡と御劔とを奉祀されましたことは前に申し述べました。垂仁天皇様が笠縫邑から今の地に遷し、皇女倭姫命を齋主とせられました。次の景行天皇さまの時、皇子日本武尊に命じて熊襲を討ち、ついでまつろはぬ東國の蝦夷どもを御征伐なされる時、尊は、御叔母倭姫命に暫らくのお暇乞ひを告げられる爲めに、伊勢の神宮へお立寄りになりました。暫らくのお別れとは申しながら、尊の御心中には、これが一生のお別れになるのではないかといふお考へが、十分にありましたでせう。



倭姫命にもさうしたお心持ちがあつたと思はれます。そこで、おわかれの印に、天叢雲劍と火打囊とを、尊にお授けになりました。尊はこれを大切に携へ、吉備武彦や大伴武日らを引連れて、遠く東北の野に出陣されましたが、駿河路に入ると、早くも奸い賊徒の手に觸れました。賊どもは尊の武勇に恐れてその軍門に降りました。が、それは全く偽りで、實はかうして尊の軍に油断をさせ、その隙を窺つて尊を襲はうとしたのでした。ですから、尊をお慰めする鹿狩りだといつて、尊を野原へ誘ひ、その周圍に火を放つて焼殺さうとしました。その時、尊は天叢雲劍を以て周りの草木を刈り拂ひ、反對にこちらから火を放つたのです。すると、ふしぎにも今まで尊を下にして吹いてゐた烈風が逆風に變り、はげしく賊どもの方へ燃えひろがつて行きました。かうして駿河の賊を平げたことは名高い話であります。この時から、天叢雲劍をまた草薙劍とも申すやうになりました。

さて、その後、日本武尊は遠く東北の野を進んで、皇化にうるほはぬ賊どもを討

平げ、常陸から甲斐に入り、碓日峠を越えて信濃の賊を平げ、それから尾張の國に入つて宮簀媛のお家に、暫らく御逗留になりました。

そのころ、近江の膽吹山にゐるもののあることをお聞きになりましたので、尊はスグ兵を率ゐて其の討伐に向はれました。その出陣の際、尊は草薙劍を宮簀媛の許において出られました。ところが尊は、此の賊を討たれた後で御病にかゝられ、御病勢は日に／＼よくない方に傾いてまゐりました。そこで、吉備武彦を天皇の許にやつて、戦ひの様子を申上げさせ、御自身も急いで都へお歸りにならうとして、伊勢の熊襲野までお出でになつた時、御齡わづか三十のお若いおん身を以てお崩れになられました。尊はおん病が愈々重くなられました時、多くのお歌を詠まれましたが、最後に、

嬢女の、床のべに、吾置きし、つるぎの大刀、その大刀はや

と歌はれました。尊は今にも御崩れにならうとせられる時まで、この尊い御劍につ

いて御心をお痛めなされたのでした。

尊のお崩れなされた後、宮簀媛はその一族のものと相談し、熱田の地に社殿を建て、草薙劔をお祀りいたしました。これが今の熱田神宮の起りであります。その後熱田神宮には宮簀媛の後裔が、長く神前にお仕へするやうになりました。

熱田神宮

所在 愛知縣名古屋市、南區熱田

祭神 草薙神劔

社格 官幣大社

熱田神宮の御祭神は、日本武尊のやうに普通の人には思はれますが、日本武尊をお祀りした神社は、滋賀縣栗太郡瀬田村にある建部神社（官幣大社）であります。

九、海の幸・山の幸

しばらく大昔の話から遠ざかつて、現代のことに移りましたが、また、筆をもとめて、遠い昔の物語にかへりませう。

或日の笠

日本海の波がのどかにうねつて、春の温い日が霞の奥からのんびり

沙の御前

と照してゐました。そよ吹く風もない笠沙の御前を、瓊々杵尊はお

一人でそゞろ歩きをなされてをりました。

前にはかぎりない海の水が遠く／＼天に連り、背後には高く大空までも聳える山のひだが、磯ちかくまで波を打たせてをりました。一幅の大畫のやうな中へ長く突出た岬の間を、帯のやうに通じてゐる道を、どこまでも／＼行かれた尊は、ゆくりなくも一人の美しい少女に出逢ひました。

尊は、不思議にまで美しいその少女を見て、

「お前は、ごこの娘か」

とお尋ねになりました。少女はおとなしく、

「妾は大山津見の神の娘でございます」

と答へました。

「名前は？」

「木花咲耶姫と申します」

尊は重ねて、

「お前には兄弟がおりますか」

とお尋ねになりますと、

「妾には石長姫といふ姉が一人ございます」

と答へました。

尊が、

「それでは、私はお前をお嫁さんに欲しいが、来てはくれまいか」とおつしやいました。すると、姫は、

「そのことなら、妾から何ともお答へすることは出来ません。どうか、お父様に

お話し下さいませ」とお答へになりました。

尊も「成程さうであつた」と思召されましたから、そのことは後にのこして、そ

のまゝお別れになりました。

木花咲

耶姫

~~~~~ 瓊々杵尊は、まもなくお使者を大山津見の神の許にお差立てになりま

した。さうして、木花咲耶姫をお嫁さんに戴きたいと申させました。

大山津見の神は、尊の思召しを大へん有り難いことに存じました。そこで、木花

咲耶姫ばかりでなく、お姉様の石長姫までも添へ、それに、お祝ひの品を山のやうに持たせて、尊のところにお嫁入りさせました。

尊は、それを見ると大そうお喜びになりましたが、お姉様の石長姫は美しい人でなく、醜いお顔の方でありましたから、尊は木花咲耶姫だけをおいて、石長姫はお戻しになりました。石長姫は、自分のお顔の醜いために戻されたのを、大そうお耻かしく思ひ、しくしく泣きながら、お父様のところへお歸りになりました。

大山津見の神は、折角差上げた姉嬢の歸つて來たのを見ると、大そうお歎きになりました。さうして、石長姫を送つて來たお使のものを呼んで、

「私が二人の娘を差上げたのには、深い考へがあつたのだ。姉の石長姫を奉つたのは、尊の御代がごんなに荒い風や強い雨に降られても、永久に動かぬ盤石のやうにありますやうにと願つたからのことでした。また、妹の木花咲耶姫は、尊の御代が山櫻の花の華やかに咲き匂ふやうに榮えて行けと祈つたからのことでした。

た。それなのに、尊が木花咲耶姫だけを止めて、石長姫をお返しになつたのを見ますと、私はよい氣持ちがしません」と申されました。

尊は石長姫を返されてから、木花咲耶姫をお妃として、笠沙の宮にお出でになりましたが、まもなく、姫は尊の御前に出て、

「妾は、もうお子さんが生れさうになりました」と申上げました。尊はごきげんわるく、

「もう、子供が生れるのかい。そんなに早く生れる子は、私の子供ではないやうだ。それは、きつと此の國の神の子であらう」とおつしやいました。姫は、

「いえ、此の國の神の子ではありません。此の國の神の子なら、無事にお産は出來ない筈ですが、天神の御子ですから、必ず安々と生れませう」

と申しあげました。

やがてお産の日が近づきますと、大きな御産屋が建てられ、姫は其の中におはいにになりました。そのお産屋には、戸口が一つもついてゐず、そのまはりを全部土でもつて塗りつぶしてしまひました。さうして、さあお子様がお産れになるといふ時には、四方からお産屋へ火をおつけになりました。

あかい火焰がもの凄いい勢ひで燃えあがつてゐる間に、安々とお産れなされた神様を、火照の命と申します。隼人勢多の先祖の神であります。その次ぎに、火須勢理の命がお生れになり、三ばんめに、火遠理の命がお生れになりました。此の神様はまた天津日高彦火々出見の命とも申されました。

### 海の幸

### 山の幸

~~~~~  
兄さんの火照の命は、海の幸彦とも申されました。それは、命が大それた漁がお好きで、毎日海へ出て行つては、大きな鱈のある魚や、小

い鱈のお魚を捕つてくるのがお上手であつたからです。

弟の火遠理の命は、兄さんとは反對に、毎日のやうに奥山へわけ入つて、毛の荒い獣や柔かい獣を狩りすることが好きでした。ですから、火遠理の命は、また、山の幸彦とも申されました。

ところが、火遠理の命は、毎日々々山へばかり行つてゐるのが飽きてきて、一度は自分も青海原へ漕ぎ出して、兄様のやうに美しい魚をとつて見たいと考へました。けれども、兄様の海幸彦はあまり弟に親切な方ではありませんでした。

「お兄さま、私に漁りの道具を貸してくれませんか。たつた一日でよいのですから——」

とお願ひして見ました。けれども、火照の命は、

「だめだ、お前なんかには、海の魚がとれるものぢやないよ」と云つて許してくれませんでした。

けれども、火遠理の命はどうしても一度海へ出て見たくて仕方ありません。それで、三度までも、お兄様に此の事をお願いいたしました。

「ねえ、お兄様、お願いですから、一度だけお道具を取代へて、私を海へやつて下さいよ」

と申しましたので、

「困った奴だな。それでは、今日一日だけだよ、いゝか」と云つて、やつとのことで取代へて下さいました。

山の幸彦は大そう喜んで、お兄様の釣鉤をかりて渚に出、ある巖の上に坐つて餌をつけ、それを波の中に投げ込んで、今にも大きな魚がつくか〜と待つてゐました。が、どうしたのか、一尾の小魚さへ釣れません。

「どうしたのだらう。今日は魚がごつかへ行つてしまつたのだらうか」などと思ふと、情けなくさへなるのでした。

それでも、根よく鉤を下してゐましたが、何としても捕れません。その中に夕ぐれが海の彼方からやつて来て、砂礫のあたりに寄せる波さへおぼろになりかけました。それでも、命の鉤には一尾の魚もつきませんでした。

「あゝあ、だめだ〜」

と云つて、困つてゐますと、その時、だしぬけにぐつと糸を曳くものがあります。

「あッ」と思つて竿をあげると、何やら大きな魚が鉤にかゝつたらしく、重い手ごたへがあります。

「占めたッ」

と思つた火遠理の命は、大喜びでぐい〜糸を引きました。鉤についた魚はよほど大きなものらしく、強い力で右へ行つたり左へ行つたりします。それを力一杯に引いてゐますと、ぐつと右手へ引かれたと思ふとたん、どうしたのか、糸の先きの手答へがすつと抜けてしまつて、あとはすーつとらくに上つてまゐりました。

見ると、大きな魚はもうどこかへ逃げてしまつて、糸の先の鉤さへどこへ行つたか無くなつてゐます。

「これは、しまつた！」

と火遠理の命はがっかりしましたが、もうどうすることも出来ません。意地悪の兄様のことから、きつと大人しく許してくれることではあるまいと思ひますと、どうしてよいか分らないほど困りました。が、併し、今更よい工夫もありませんから、仕方なしにすごく戻つてまゐりました。

火照の命の方は、弟の弓矢を持つて山へ行きましたが、これも馴れないせい、か獸一匹鳥一羽とれません。がつかりして歸つて來ましたが、弟の戻るのを待つて、

「駄目だ、こんなものを取代へたばかりに、今日は一日むだ骨を折つてしまつたぞ。さあ、道具を取代へよう」

と申しました。火遠理の命は何と答へていゝのか分らなくなつて、たゞ下を向いて

黙つてゐました。火照の命はまだるさうに其處へ弓矢を投出して、

「さあ、どうしたのだ。早く鉤を戻さないか」

と催促します。火遠理の命は仕方なくなりましたので、

「御免下さいお兄様。あなたの鉤は、つい、魚にとられてしまひました」

と本當のことを云つて、あやまりました。すると、火照の命は大そう憤つて、

「馬鹿なことを云ふな。鉤が無くては私の仕事が出来ない。どうしても返さなければ承知しないぞ」

と云つて、許してくれません。

火遠理の命は、困つてしまひました。そこで自分のお腰にさげてあつた十拳の劔を打ちこはして、それで五百本の鉤をこしらへ、それを兄神のところへ持つて行つて、

「お兄様、どうか此の鉤を差上げますから許して下さい」

と云つてお願ひしました。けれども、火照の命は一寸見たばかりで、

「だめだ、く」

と云つて許してくれません。火遠理の命はまだ此れでは少ないのだと思つて、それから又た一生けんめいになつて、更に一千本の鉤を作りあげ、今度は許してくれるだらうと思つてお見様に奉り、

「どうか、これで勘忍して下さい」と頼みました。

それでも火照の命は許しません。

「こんな鉤を千本持つて來ても二千本持つて來ても駄目だ。私のやつた、もとの鉤を持つて來なくては許さないぞ」と申します。

「でも、あの鉤は魚の口について無くなつたのですから、持つて來られないので

す。そんな無理なことをおつしやらないで、どうか此れで勘忍して下さい」と云つて願ひしましたが、どうしても駄目でした。火照の命は、

「何が無理だ。お前の弓矢は返したぞ。それだから、お前が私の鉤を返すのは當り前ぢやないか。さあ、早く返せ。キツと戻せ」と云つて憤りました。

火遠理の命は本たうにこまつてしまひました。仕方なくぶら／＼と海岸を歩いて見ました。

海は廣々として果てもなく續いてゐます。遠い／＼海の果てに、雲とも山とも見わけのつかないものが横たはつてゐる姿さへ見えますが、水の中にはどんな魚が泳いでゐるのかわかりません。それはあたりまへのことで、ましてやどの魚が自分の鉤をとつてゐるのか少しも分らう筈がありません。命はとある砂はまに立つてぼんやりと彳亍してゐました。いつの間にか命のお目には涙が光つて居ました。



火遠理の命は、しばらく其處に泣いてをりましたが、突然、誰れか耳許で、  
「もし〜」

と云ふ聲に驚いて目をあげました。見ると、そこには鹽椎の神といふお爺さんの神  
様が立つてゐました。

「……………」

鹽椎の神は氣の毒さうな顔をして、

「どうなさいました。なせ、そんなにお泣きなさいますか」  
と親切にたづねてくれました。

そこで、火遠理の命は最初からのことを詳しくお話して、

「兄さまは、どうしても私の拵へた鉤はとつて下さらず、何でも元の鉤を持つて  
來いとおつしやるのですが、此の大海の中にあるたつた一尾の魚の口に刺さつた  
鉤を、どうして探せるものでせう。けれども、探さなければ兄さまが許してくれ

ず、どうしたらよいのか分りません。それが心配で泣いてゐるのです」  
と申しました。

鹽椎の神は、それをきかれて、よけい氣の毒に思ひました。

「左様ですか、それはさぞおこまりでせう。それでは、私がよいことを考へてあ  
げませう。まあ安心なさい」

と申しました。火遠理の命は喜んで、

「さうですか、何かよい考へがありますか」

と尋ねるのを、鹽椎の神は、

「まあ、少しお待ちなさい」

といつて、竹を持つて來て、無間勝間といふ小舟を編みました。さうして、

「さあ、これにお乗りなさい」  
といつて命を乗せ、



ふ給せはとを神海てねづたを釣の神兄てに舟竹

「今、私が此の舟を押し出しますから、安心してすつと沖へ出てごらん下さい。きつと良い瀬路に流れあたりませう。さうしたら、その瀬の流すとほりに流れて行くのです。すると、きつと魚の鱗を並べたやうな——海の神様の御殿に突當ります。その御殿の御門には、傍に小さな井戸がある筈です。そこには井戸の上まで枝を張つてゐる桂の木がありますから、あなたは其の桂の木の枝にのぼつていらつしやい。すると、海のお姫さまが、きつとあなたを見つけるに違ひない見つかつたらもう安心です。あとの事は、其のお姫さまが、必ずよいやうに考へて下さるでせう」と申しました。

井戸水に映る貴い影  
火遠理の命は、教へられた通り竹の小舟に乗つて、はるか沖へ出て行きました。

その中に、遠くの沖合から、帯のやうに流れて来る一すじの瀬が目につきました。

「これだな」

と思つて、命は舟をその上にのせました。小舟は漂々として流されて行きました。しばらく行くと、なるほど魚の鱗を並べたやうな、美しい宮殿が見え初めました。あれが海神の御殿だと思つて舟を寄せますと、鹽椎の神の言つたとほり、そこには立派な御門が建て、ありました。

火遠理の命は喜んで行つて見ますと、なるほど御門の傍に一つの井戸がありました。さうして、井戸にかぶさるやうな枝を延した桂の木もありました。

「此れだ。此の桂に登つてゐるのだな」

と云つて、命は桂の木によちのぼり、枝のわかれ目の處にうづくまつてゐました。しばらくすると、門の中から一人の娘が出て来て井戸から水を酌みあげようとし

ました。ところが、丸い鏡のやうな井戸水の面には、桂の木にゐる火遠理の命の顔がくつきり映つてゐました。娘は、海神の家の侍女でしたが、それを見てふしぎに思ひました。そこで、桂の木を見あげますと、命は、

「水を一つくれないか」

とおつしやいました。

侍女は、いはれるまゝに水を汲んで差上げました。

命は、それをお飲みになるのかと思ふと左様ではなく、ご自分の頸から飾りの玉を一つお取りになり、それを口にふくんでぶつと壺の中へお吐きになりました。珠は壺の中へ落ると、ころり／＼と轉げた後で壺の縁へ確りくツついてしまひました。

侍女は恐る／＼その珠を取らうとしましたが、どうしてもとれません。仕方がないので珠のついたまゝ水の入つた壺を持つて、豊玉姫のところへまゐりました。此の侍女は、豊玉姫に御奉公してゐたのでした。

豊玉姫は壺をごらんになると、スグ美しい珠のついてゐるのに氣がつかしました。

「オヤ、此の珠はどうしたの？」

とお尋ねになりました。

侍女は、

「お姫様、これは何ですよ。——只今、妾が井戸へまゐりますと、あの桂の木の枝に、お若い、美しい男のお方がをりました。さうして、私に水をくれと申しますから、此の壺を差上げますと、水はお飲みになりませんで、こんな珠をお吐きになりました。それで、妾がとらうとしましても、どうしても取れませんので、持つてかへりましたのです」

と詳しく申上げました。

豊玉姫は、

「それは、ふしぎなことです」

と云つて、わざ／＼御門の方へ出て行かれました。御門の傍の桂の枝には、光り輝くやうな火遠理の命の姿が見られました。姫はびつくりして、そのまゝ御殿の中に駆けもどり、

「お父様、／＼、御門の外に美しい見馴れないお方がいらつしやいますよ」とお告げになりました。

海の神様は、誰がゐるのだらうと思つて、外へ出てごらんになりました。さうして、

「あゝ、この方は、天津日高の御子で、虚空津日高と申されるお方だ」といつて、

「さあ、どうぞ此方へいらつしやいと、御殿の中へご案内なさいました。」

海の神さまは、火遠理の命を、それは／＼お大切にもてなしました。お座敷には

海驢の皮でこさへた敷物を八枚も重ね、その上にまた絹で縫はれた敷物を八枚重ねそこへ命をお座らせになつて、びつくりするやうな御馳走をうんと出し、みんな命をもてなしました。

三年目の火遠理の命は、思ひがけない海の神の厚いもてなしに満足し、美し  
或る夜 い豊玉姫をお妃にして、楽しい月日を送りました。

やがて、一年の月日が過ぎました。

何の爲めに自分が此處へ来たのかも忘れて、楽しい月日を送るうちに、又た一年がたちました。

三年目の年も、同じやうにして終へようとなりました。

或る晩のこと、火遠理の命はふと夜中にお目を覺されました。静かな秋の夜  
のことで、外には虫の音一つ聞えませんが、天も地もたゞひっそりかんとしてゐる間

に、遠くに鳴る濤の音が、ときれ／＼に枕べに落ちてくるのでした。命はその濤の音を耳にしてゐる時、頭のどこかから、ふと三年前の姿が現はれて、それからそれへと昔のことが聯想されて來ました。なぜ自分が此處に來てゐるのか？ それがはつきり分つて來ると、自分はかうして空しくしてゐる時ではなかつた、早く兄様の鉤を探して歸らなくてはならない身であつたと感ずるやうになりました。さう思ふと、命は思はず、

「あ——あ」

と長い吐息を洩しました。

傍にやすんでをられた豊玉姫は、それをおき／＼になつて不思議に思ひました。そこで、

「なぜ、そのやうにお歡きなさいますか」  
とおたづねになりました。が、命は、

「いや、何でもないよ」

と云つて教へません。

けれども、豊玉姫はきつと此れは何か御心配なことがあるに違ひないと思はれましたから、あくる朝になると、直ぐお父様の海神のところへ来て、

「どうもふしぎでなりません。三年の間一緒にお出でなさつても、ついで一遍おなげきなされたことのなかつた命が、昨夜に限つてあんなにお歎きなさつたのですから、必ず何か御心配なことがあるに違ひありません」

とお告げになりました。

お父様の海神も成程とお考へになりました。そこで、火遠理の命に向つて、

「只今娘からさしますと、あなたは三年この方一度もお歎きなさつたことは無いと申しますのに、昨夜にかぎつて大きな聲でお歎きなさつたといふのは、必ず深い理由があるのでせう。どうか隠さずにそれを話して下さいませんか」

とおたづね申しました。

火遠理の命も、モウ仕方がありませんから、そこで細かく今までのことをお話しになりました。お兄様の海の幸彦と道具を換へたこと、その釣鉤を失つてしまったこと、お兄様に責められて鉤を探しに此處へ来たこと等を、事細かにお話しました。

それを聞くと海の神様は、

「それは、お氣の毒なことでした。しかしそれなら御安心なさい。きつと私が其の釣針を取返してあげませう」

と云つてくれました。

命は大そう喜んで、

「それは有り難いことです。どうか探して下さいませう」  
とたのみました。

鹽みつ珠と 或る日、海の神様は、すべての海の魚どもに向つて、一つのこら  
鹽ひる珠 ず集るやうにと命じました。魚どもは、鱧の大きいのも小さいの  
も、みな争つて集りました。その時、海の神様は、

「これ、皆んなのもの。お前たちの中に、だれがお口に刺をさして苦しんでゐる  
ものはないか」

とお尋ねになりました。

すると、群つた魚の中から一尾、ツツと泳ぎ出てきたものがあつて、

「神様、私はこんなものがお口に刺さつてゐて、痛くて／＼困つてゐますよ」  
と申しました。

見るとそれは一尾の赤い鯛で、なるほど、口をまげて、疼さうにしてをりました。  
海の神は喜んで、

「あゝ左様か。それは疼かつたらう、ざれ、口をあいて見せなさい」

と云つて、ご自分の指を、鯛のあけた口の中へぐいと入れました。さうして、チク  
リと指にさはつた硬いものを出して見ますと、それは尖のまがつた一本の釣でした  
から、それを命にお見せになつて、

「この釣ではありませんか」

と申しました。命は一目見ると、

「あ、これです。この釣が私の借りた兄様の釣です」

と答へました。海の神が見ると、赤い鯛は大喜びで泳いで行きました。

海の神は、それを命にお渡しになつて、

「では、あなたは此の釣を持つてお歸りなさるがよい。さうして、早くお兄様にお返しなさい。だが、この釣をお返しなさる時、あなたはかうおつしやるのです。  
おぼち！  
おぼち！  
すすち！

まぢぢ!

うるち!

と云ひながら、兄様にお尻をむけて、後手にお渡しになるのです。よいですか」と申しました。命はをかしたとだと思ひました。

「どうして、そんなことをするのですか」

と尋ねましたが、海の神は、

「どうしてよい、たゞさうしてお返しなさればよいのです。しかし、あなたの兄様は心のよくない人ですから、これからも、きつとあなたによいやうにはしてくれません。そこで、あなたは、兄さまが高い田をお作りになる時は低い田を作りなさい。また兄様が低い田をお作りになる時には高い田を作るのです。私は水の事はどうにでもする力を持つてゐますから、毎年あなたに幸ひを興へてあげます。兄様は年々ものがとれないで、だん／＼貧しくなつて行きませう。貧しく

なると、必ずわるい心をおこして、しまひにはあなたを攻めてくるに定つてゐます。その時のために、私からあなたにあげるものがあります」

と云つて、海の神は、りつばな二つの珠をお出しになりました。

「これは鹽盈珠と鹽乾珠とです。若し、兄様が攻めてこられた時は、この鹽みつ珠をお出しなさい。さうしたら、見る間に海の水が一ぱいになつてきて、兄様はたちまち水に溺れてしまひます。それにおどろいて兄様が助けてくれと申したらこの鹽ひる珠を出すのです。さうすれば、これは又みる間に水が乾くでせう。生命を助けられてからの兄様は、もう何でもあなたの云ふことをきくやうになりますよ。さあ、それでは、早くこれを持つておかへりになるがよろしい」

と云つて、二つの珠を、命の手にお渡しなさいました。命は、

「有りがたうございます」

と云つて、二つの珠をいたゞきました。



さて、海の神様は、

「鰐たちはみんな集りなさい」

と申しました。海の中にある鰐たちは、神さまの命令ですから、みんな急いで集りました。その数はいく千萬だかわからない程でした。鰐たちは、

「何だらう、何のご用だらう」

と云つて、お互に話合つてゐました。

海の神は、その時、

「みんな、ご苦勞であつた。お前たちに集つてもらつたのは、少し頼みたいことがあつたからだ。それは、今こゝにいらつしやる天つ日高の御子さまが、お國へお歸りなされるので、お前たちの中の一ばん速いものに、お送りしてもらはうと思ふのだが、どうだ、ごの位の日數で送れるか」

と申されました。海の鰐たちは、みんな自分々々の速さをかんがへて、

「私は三日で送ります」

「僕は五日かゝります」

「いや、私なら二日で行かせよう」

と、思ひ／＼に申上げました。

神さまは、お聴きになつてから、

「も少し早く送れるものはないか」

とおつしやいました。

鰐たちが、もち／＼してゐる中から、一尋の鰐が泳ぎ出て、

「私が一日で送りませう」

と申上げました。

神さまは大そうお喜びなされて、

「一日とは速い。それではお前に頼むことにしよう。失禮のないやうにお送り申

せよ」

とお言ひつけになりました。

一尋の鰐は大人しくそこに浮んで、

「それは、大丈夫でございます。お早くお乗り下さい」

と答へました。

火遠理の命は、海の神さまたちとおわかれして、静に鰐の背中に乗りました。鰐は下から、

「しつかりつかまつて下さい。急ぎますから」

と云ひました。

「大丈夫だ、いそいでくれ」

と命が申しました。

鰐はおだやかな海の上を、矢のやうに速く進みました。みどりの波が二つにさけ

て、きれいな浪の峰が兩がはへうねつて行きました。

命はちつと鰐の背中につかまつてゐました。鰐は息もつがないほどに走つて、青海原をどれほど進んだか知りません。夕方になると、無事に虚つ日高上國に着きました。命は、

「どうも有り難うよ」

とおつしやつて、そのお禮として、お腰にさげられてあつた紐のついた刀をとつて鰐のくびにつけてあげました。鰐はよろこんで、ゆるくと海の彼方へ泳いでいきました。

おぼろ 火遠理の命がおかへりになると、兄様の火照の命は、にくい弟がもど

すすち つてきたと思ひましたから、すぐ

「お前は鉤をさがしてきたのか」

とおたづねになりました。弟の命は、

「はい、持つてまゐりました」

「では、すぐ返せ」

「いま、お返しします」

と云つて、

「さあ、

おぼち！

すすち！

まぢち！

うるち！

……………」

「何だ、それは。早く返さぬか」

「さあ、おとり下さい」

と云つて、弟の命はくるりお尻をむけて、後手に鉤をお出しになりました。

兄の命が取つてみますと、それはたしかに火照の命のものでしたから、何とも云ふことはありませんでした。

兄弟の命は、それから一しよにをりましたが、兄の命はその年高い田にお米をつくりました。で、弟の命はひくい田を作りました。すると、其の年はめづらしい日照りで、ほとんど雨といふものが降りません。ですから、高い田の苗はみんな枯れてしまつて、低い田ばかりがよく實りました。兄の命はこまつてしまひました。あくる年には、兄の命はむりに弟の命のひくい田をとつて、

「今年はお前が高い田を作れ」

と云つて、あべこべにお百姓をしました。すると其の年は、去年とはんたいに雨ばかり降つたものですから、高い田はよく實りましたが、低い田は水が一ぱいにな

つて、苗の莖はみんななくさつてしまひました。兄の命はいよく貧しくなつていきました。

かういふことが何年かつゞきましたので、兄の命はだん／＼貧乏になるのに、弟の命には幸ひが重なつてまゐりました。それを見て、兄の命は口惜しくて／＼なりません。とう／＼また悪い心を起して、

「弟のやつを攻め亡ぼしてしまはう」としました。さうして、火遠理の命がゆだんしてゐるのを見すまし、急に攻めかけてきました。

弟の命は、それでもあわてません。

「なせ兄様は、そんならんぼうなことをなさいますか」

と云つてゐました。兄の命は、

「何でもいゝ。お前はじやまな奴だから、かうしてやるのだ」

と云つて、大きな刃で切つてかゝりましたから、弟の命は一足あとへすさりながら手早く躡みつ珠をとつてお投げになりました。

さあ、大へんです。

大海原の水が、見るまにぐん／＼ふゑてきて、野も山も一刻々々水にひたされてきました。火照の命の足もとにも、水がざあ／＼とかぶつてきました。

「これはどうしたことだ」

と云つて、あわて出した兄の命は、それでも何とかして水から逃れようと思ひましたが、水はますます／＼ふゑてきて、足から膝へ、膝から股へ、それから胸へ、それから首へと一ぱいになつて、今にも溺れてしまふばかりになりました。

「あゝ、これはたまらない。弟、助けてくれ、私がわるかつた、助けてくれ」と申しました。それでも、弟の命は、

「悪いことがわかりましたか。うそではないですか」

と云つてゐます。その間にも水はいよ／＼増してきて、兄の命は浮いたり沈んだりしてゐながら、

「うそではない。早く助けてくれ、死んでしまふ」

と云つて、ガブ／＼してゐました。

それをみた弟の命は、

「では、助けてあげませう」

と云つて、鹽しほひる珠たまをとつて、サツとお投げになりますと、ふしぎや今までの大水が減つてきて、しばらくすると、そこは元どほりの丘かみになつてしまひました。

ぬれ鼠ねずみのやうになつた兄の命は、心のそこから弟にはかなはないと感かんじました。そこで、

「今までは、みんな私がわるかつた。その代り、これからは一生お前の家の番人になつて、お前を守ることにしよう」

といつて、あやまりました。

それでも、弟の命はまだお話はなしもろく／＼されず、笑顔一つしなかつたものですから、兄の命は、或る時とき小牛こぎうしの鼻はなのやうなお面めんをつけ、顔かほには赤あかい土つちをぬり、足をばたく／＼させて、丁度水におぼれて苦しむ時のやうな様子で舞まひました。弟の命もこれを見るとお笑わらひになり、お心を和やわらげるやうになりました。

この後のち、兄の命の子孫しそんは九州の南みなみ（大隅薩摩）の國に住んでゐましたが、隼人はやとといつて、毎每年都へ上つて皇居くわうきよを守る役目やくめについてゐました。また其の時の舞まは、子孫しそんの間に長く傳つたはつて、これを隼人はやとの舞まと申しました。

## 一〇、東を指して

鵜がや葺き

火遠理の命は、また彦火火出見命とも申しあげます。日向の高千

あえぬに

穂の宮にいらつしやいましたが、やがて海の神のお娘豊玉姫の命

が、わざ／＼海の國からたづねてまゐりました。

豊玉姫は久しぶりにあつた夫の命をみて、涙をながしてうれしがりました。さうして、申しますには、

「妾はまもなくお産をする時になりました。天つ神のお子様を、海の國でお産み申すのは、もつたいたないことですから、わざ／＼お産をしにまゐりました」

彦火火出見命も、大そうお喜びになりました。

「それはうれしいことだ、よくきてくれた」

と云つて、いそいで海へにお産をするお家——産屋をつくられました。その産屋

は、鵜の羽をあつめてお葺きにならせました。

ところが、まだ其のお屋根のふき終らない中に、姫は大そうお腹が痛まりましたので、産屋にお入りなさいました。産屋は海べのことですから、天の忍人命がお供をして、砂はらから這ひこんでくる蟹を、箒をこさへて掃ひ／＼しました。それから、この命の子孫は掃守といつて、長く御殿の敷きもののお世話をするやうになりました。

豊玉姫の命はお産屋にお入りになる時、彦火火出見命にむかつて、

「どこの國の人がお産をするときにも、みんな自分々々の國の形になつて子を産むものですから、妾もこれから、もとの姿に變つてお産をせねばなりません。ですから、あなたは決して妾を見ては下さいませぬ」

とお願いいたしました。

彦火火出見命は、

「それでは」

と云つて、お産屋をお出になりましたが、どうしても姫の言葉が氣にかゝつてなりません。

「どうも、をかしいことを云ふものだ。一たい、どんな姿になるといふのだらう」

といつて、ふしぎがつてゐましたが、それが見たくてならなくなりました。で、今お子様がお生れなさうとした時、だまつてそつとお祝きになりました。

すると、これはどうしたことせう。今の今まで輝くやうに美しくあつた豊玉姫の姿はどこへ行つたかかげもなく、産屋の中には、八尋もあらうといふ大鰐が、どたばたと、のたうち廻つてゐるではありませんか。命はそれをごらんになると、びつくりして、

「あッ」

といひながら、どん／＼そこをお逃げになりました。

その間に、姫はやす／＼と、玉のやうな美しい皇子をお産みになりました。

けれども、命からのぞき見をされたことを知つてゐましたから、それを大そう耻かしいことに思ひました。

「かわいい王子よ。妾はいつまでもあなたを見るために、海の道から通ふつもりでゐましたが、此のからだを見られた上は、もうそれも出来なくなりました。二度とこの國にはまゐりません。ごりつばにお育ちなされませ」

と云つて、産屋をお出になり、海の國への路をふさいでしまつて、はるかに遠い海原へとお歸りになつてしまひました。

のこされた王子は、お名前を鵜葺草葺不合の命と申し上げました。



名残まづつ豊玉姫の命 海國へお歸り遊ばる

海の國の

豊玉姫の命は、彦火火出見命からのぞき見されたことを、大そう恨たよりめしく思ひましたが、たゞお産みになつたまゝ残してきた王子のことが心にかゝつてなりませぬ。夜も晝も、たゞお子様ばかりがこひしくてなりませぬ。そこで、お妹の玉依姫をこの國へお使ひに立て、王子をお手許へいたゞいてお育てにならうとしました。

玉依姫は、この國へお出でになつて、彦火火出見命にその事を申しあげ、同時に豊玉姫から頼まれてきた一首のお歌を命に差しあげました。尊がそれをごらんになりますと、

赤いたまは、それを結んだ緒までも光るけれども、それにもまさる白い珠のやうな、清くてけだかいお姿を、したはしく思つてをりますよ。といふ歌でした。

命は姫のお心を大そうお可哀さうに思はれました。ご自分からは出で來られない



海のむかうの國にゐて、その子を戀ひしたはれる母の心を思ひやられましたがお子様をやることは出来ませんから、代りに、命からもかうした一首のお歌を送られました。

沖にゐる鳥の、鴨のつく島で、たがひに仲よくくらし、お前のことは、この世のつく限り、いつまでも忘れるものではないよ。

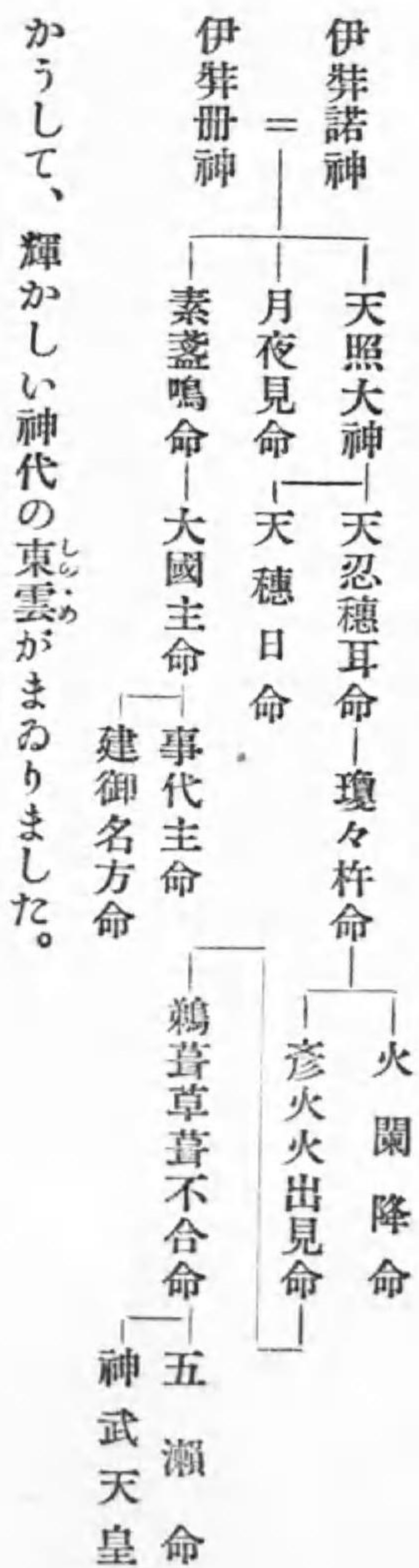
といふお歌でした。

神代の

鵜葺草葺不合の命は、玉依姫をお嫁さんにして、四人の御子さまをお東雲産みになりました。その第一の御子は五瀬の命、第二の御子が稻氷の命、その次ぎが御毛沼の命、第四の御子が神日本磐余彦の命と申し、後に神武天皇と申されたお方でありませう。この中で、御毛沼の命は、波の穂頭を踏まれて常世の國にお渡りになり、稻氷の命はお母様の國である海原にお入りになりましたから、

高千穂の宮には、五瀬の命と神日本磐余彦の命だけがお出でになりました。

日本の歴史で神代と申しますのは、この鵜葺草葺不合の命までなのです。そのお子様からは高千穂宮をはなれて、大和に都をうつされ、第一代の帝位をふまれましたから、それからが人の代となり、今日のやうな日本の建國が営れたのです。今お話がその方に入る前に、謹んで神代の御系圖を記しておきませう。



都を東に 天孫御降臨この方、神々はすべて日向の高千穂に大宮居をさだめて  
もとめて あられましたから、西の國々はいづれもよく治まつてをりました。

そのころの九州には、神々の御子孫もだん／＼多くなつてもまゐりましたし、元からそのあたりに住んでゐた熊襲といふ土人のらんぼうも、だん／＼少なくなつて來ましたから、もう御心配になることはありませんでした。

けれども、大八洲の國は廣うございました。九州の一島がおだやかでも、まだ本洲初め東の島々までは、皇室の御威光がとゞきません。ところどころに、わる者どもがはびこつて、よくないことをしてゐました。

神日本磐余彦命は、この有様をみて大そう御心配になりました。豊葦原の瑞穂國は、天地のあるかぎり、天照大神の後裔の治めたまふべき國土であるのに、その稜威にまつろはぬものゝあるのはよくないと考へましたから、命は早くさういふものを征伐して、日本中を平定しようと思ひました。

或る日、命は、お兄様の五瀬の命にむかつて申しました。

「そちここに、悪ものどもが無くならないのは、あんまり都が西にかたよつてゐる爲めではないでせうか」

五瀬の命も同じお心でしたから、

「私もさう思つてゐた。都をもつと東の方へうつすがよからう」と申しました。

かうしてご相談ができましたから、いよいよ新しい都をもとめて、東の國へお出かけになるじゆんぴにとりかゝりました。

東の國々には、前にも云つたやうな悪ものどもがある上に、まだ世の中が、よく開けてゐませんから、そこへ出かけて行くのには、たくさんのおかきものを持つて行かなければなりません。海をわたるには多くの船も造つておかなければなりません。わる者どもを討つ戦さの道具もそろへてゐなければならぬので、かうしたい

ろくのじゆんびをするために、高千穂の宮はそれからいそがしい月日を送ることになりました。

## 一一、鳥のゆくへ

日向を

そのうちに、いろくのじゆんびも出来ましたから、命たち御兄弟は

あとに

たくさんの家來たちをつれ、多くの糧食や戦さ道具を持たれて、長い間住みなれた高千穂の宮をお出ましになりました。

日向の國の高千穂の宮！そこは、命たちにとつても、お供をする多くの人たちにとつても、それはく思ひ出の深いところでした。天孫瓊々杵命が、日の神の大名ことのりをいたゞいて、初めてこの大八洲にお降りなされたところでもあり、その後、引つゞいて御子孫の神々が此の國を治めてゐられたお宮でもありました。聳える山も、流れる川も、その山に生える一莖の草、その川に遊ぶ魚くづの一尾にもこの人たちの心はひかれました。

しかし、今よりももつとりつばな日本國を建てよう、それが天照大神の大御心に

叶ふものだとお信じなされた命の御一行は、そのなつかしい山川にわかれ、雲の飛ぶ峯を降りて、だん／＼と日向の國を進まれました。

命の軍勢は、やがて海へに出ました。そこには大きな波がどぶん／＼と岸をうつて、みどりの海がどこまでもつゞいておりました。今の宮崎といふところから、命の軍勢は、たくさんの船にのりこんで、元氣よく速吸門——今の豊豫海峡の方へお出でになりました。

はざまの海に照りかへす朝日夕日、船路を照す美しい月影をながめながら、たくさんの船どもは、おだやかな航海をいたしました。が、はじめて出る海のことでしたから、時どきは、方角などに苦しむこともありました。命たちは、だれかよ、海のことを知つてゐるものがほしいと思ひました。

さう思ひながら、速吸門までまわりました。すると、その海の上にふしぎな男が一人、大きな龜に乗つて長い竿で釣をしてゐました。その男は、命たちの船の来る

のを見ると、鶏が羽ばたきをする時のやうに袖をふりながら、命たちの船にやつてまわりました。船の人たちは

「何だらう、あれは」

と云つて見てゐました。

やがてその舟が近づいてきました。命はその男をお呼びとめになつて、

「お前は誰れか」

とお尋ねになりました。その男は、ていねいに、

「私は、この近くの國に住んでゐる國つ神で、名を珍彦と申します」

と答へました。

命は大そう喜ばれまして、

「さうか、この近くに住んでゐるなら、海の道もよく知つてゐるだらう」と申しますと、珍彦は、

「はい、それはよく存じてをります」とお答へいたしました。

「では、今から私の家來になつて、海の道の案内をしてもらはうではないかと命が申されますと、珍彦は、

「宜しうございます。きつと御案内いたしませう」と快く仰せに従ひました。

命はいよゝ喜ばれて、

「それは有りがたい。これで安心した」

と云つて、長い竿をおろして、龜の甲から珍彦をお舟にうつしました。

宇沙から  
岡田の宮へ

命はそれから豊前の國に入つて、宇沙といふところまでお出でになりました。そこには宇沙津彦・宇沙津媛といふ二人が住んでゐ

ました、その二人は、皇軍がこゝへお出でになつたといふことを聞くと、

「どうぞ、私のところへお立寄り下さいますやうに」

と云つて、わざ／＼足一つ騰りの宮といふりつばな神殿を作り、そこへ命の軍勢をお招きして、盛んなご馳走をいたしました。

命は宇沙津彦のお迎へをよろこばれて、しばらく其處に止られましたが、やがて其處を出られて、今度は筑紫（筑前）の岡田の宮へお進みになりました。今の遠賀郡の中ほです。

岡田の宮には一年ばかりお出でになりました。そこらあたりにゐる悪ものどもを御征伐になつたり、足りない戦道具や兵糧をつくられたりして、もつと東へ出るじゆんぴをいたしました。

多祈宮から

高島の宮へ

岡田の宮をお出ましになられた命は、波しづかな、あの瀬戸の内海を進んで、安藝の國にみ船を寄せ、多祈宮に本營をお定めになりました。多祈宮は埃宮ともいひ、今の府中村の内であらうといはれます。

命は、此處から吉備の高島宮にお進みになりましたが、この間に十年餘りの日數を費されました。高島宮は今の兒島郡甲浦村宮浦であらうと云はれます。命がこの兩地にお出でなさる間に、十たびあまりも花が咲いて葉が散つたのは、決して短いことではありません。命が、この長い年月を、この地方にお過しなさいましたのは何故でせう。今から考へますと、ふしぎのやうにも思はれないこともありませんが考へて見ますと、少しもふしぎではありません。

昔から、「腹が減つては戦さが出来ない」といふ言葉があります。全くその通りで戦さといふものは、決して強いばかりで勝てるものではありません。いかに武勇に勝れてゐても、人は十分に食物を攝らなければ元氣も勇氣も衰へてしまひます。で

すから、軍隊の後には必ず糧食が運ばねばなりません。ところが、今とはちがつて大昔のことですから、糧食といつてもさう易々と手に入るものではありません。殊に命の軍勢は、少しばかりの人数ではなかつたのですから、糧食もたくさん要るのです。その糧食を得るために、命は行く先き々に踏止まつて、耕作のこともなさいました。土地の良民をあはれむと共に、悪いものどもをば退治されました。さうした上で、目ざす大和の大敵を屠る戦法も考へ、いくさ道具も造らせて、長い月日も短かく暮したのであります。

かうして、凡ての準備はととのひました。

浪速の津から

一路倭へ

いよ／＼戦備が整ひますと、一刻も早く倭へ入つて、良民を苦しめてゐる悪者どもを打平げねばなりません。民を愛する命の大御心は、少しの猶豫もなく、忽ち全軍をあげて東の國へ進めました。

瀬戸の内海は油のやうに平かでした。濱の千鳥は聲ごゑに鳴いて、皇軍の門出を祝ひ、冴えわたる秋の空はあくまで高く澄んで、皇軍の意氣を旺んにしました。命の率ある舟いくさは、勇氣に満ちて攝津の海へ——今の大阪灣に堂々と入つてまゐりました。

見ると、この海は波が高く、流れの如く潮が奔つてゐました。

「おゝ、浪が速い」

と皆が申しました。この時からです、この浦一帯を「浪速」といふやうになつたのは。後には難波といふ文字を使つて、同じに「なには」と讀ませました。

浪速の浦をお過ぎなされた命のみ軍は、こゝから河内の國を過ぎ、生駒の險山を踰えて、一路目ざす倭へ攻入らうとなさいました。そこで、み軍は河内の白肩の津までまゐりました。

すると、此のことが早くも倭の方へ知れわたりました。倭の鳥見には、悪者の大

將である長髓彦といふものがゐて、近隣にその威を振つてゐたのです。

長髓彦と

鳥見の長髓彦は、愚かなものではありましたが、大そう強い、ごん

饒速日命

なこともやり通す男でした。たくさんの手下を持つて、天下に自

分ほど強いものはないといつて威張りちらしてをりました。そればかりではありません。長髓彦の勇氣にもう一つ輪をかけることがありました。彼が口ぐせにいふことは、

「私の戦さは、神様のご命令であるぞ」

といふことでした。なせ長髓彦のやうな賊將がこんなことを云つたのでせう？ 併し、これにはわけがありました。

長髓彦のところには、本當に神様がお出ででした。それは、饒速日命と申される神様で、このお方は、早く高天原からこの國へお降りなされました。長髓彦はそれ

を非常に有りがたく思ひました。そこで、命をお迎へして之を奉じ、あくまで命に忠義を立てようと決心しました。命もその心をお喜びなされ、長髓彦の妹をお娶りになられ、今では可美真手命と申されるお子様もお生れになり、長髓彦たちを指圖しては、倭の地方をお拓きなされてをられたのです。この可美真手命こそ、後に物部氏といつて、我が皇室に忠義な家來となつたものの先祖であります。たゞ悲しいことに、長髓彦は愚かな爲め、神様といふものは、饒速日命の外にはないものだと定めてしまつてゐました。

ですから、神武天皇のみ軍が白肩の津にお着きになつたことを聴き、而もそれは神様のみ軍だといふことを傳へられると、大きな聲で笑ひました。

「愚かなことを云ふ奴だ。神様はこちらにお出でなさるではないか。饒速日の命をおいて他に神様がお出でなさる筈はない。詰らぬことをいふな」

と云つて、手下のものを叱りつけました。それでも、手下の者が「いや天神の裔と

あるさうですよ」と話しますと、長髓彦はとう／＼憤り出してしまひました。

「よし、憎い奴だ、神様のみ軍だなどとうそをつくとは不届だ。そんな奴なら一歩も倭へ入れてはならぬ。さあ來い、一と戦して其奴らを追拂はう」

と云つて、大勢の手下を連れて天皇のみ軍を攻めにかゝりました。

**日を選び** 長髓彦の賊軍が攻め寄せますと、天皇は御兄五瀬命とご一緒に、御

**て熊野へ** 船にとゝのへてありました楯を取り出され、部下の兵たちを勵まし

て激しい戦さをたゝかひました。弓矢が飛び、楯が動く下から、嵐のやうな鬨の聲が兩軍の間を掠めて、物すごい戦ひがつゞきました。そのために、この地を楯津と申すやうになりましたが、後に日下の蓼津と云はれるやうになりました。

戦ひはいつまでも續きました。賊軍の勢ひは大そう強くて、さすがの皇軍もたやすく打破ることが出来ません。初夏の野を飛ぶとんぼのやうに亂れる矢の下から、



鉾を振つた敵味方の兵たちが行交ふ姿は、眞に勇しいものでした。

思つたよりも頑強な敵の働きを御覽なされた天皇様は、御兄五瀬命と共に陣頭にお立ちなされ、「やれ引くな」「それ進め」と云つて、味方の軍氣を勵まし〜お指圖をなさいましたから、さすがの賊もだん〜攻め立てられて、とう〜逃出してしまひました。

それを見た皇軍は、瀬のやうな勢ひで賊軍を追ひまくらうとしました。その時です。陣頭に立つて諸兵をお指圖なさつて居られました五瀬命に、どこからともなく飛んできた流れ矢が中りました。

「あッ」

といふ間もなく、差つた矢疵は深く、赤い血汐がそこから流れ出ました。

命は大そうお驚きなされ、急いでお兄様の介抱につくされました。併し五瀬命は勇氣のあるお方でしたから、少しも弱りはいたしません。矢疵は少しのお手當をな

されたまゝにしておいて、ご兄弟の間に軍のご相談がはじまりました。その時、五瀬命の申されますには、

「考へて見ると、私たちの軍はどうも間違つてゐました。日の神の御子と生れた私たちが、日に向つて戦ひをしたのが最初からよくなかつたのです。それだからあんな賊どもの矢にも中る。これはどうしても道を變へて、日を背にする方角から攻め込まなくてはなりません」

と申しました。命も成程と思はれました。

「これは御尤もお言葉です。私もそれは考へませんでした。それでは、早速そのやうに致しませう」

と云つて、味方を集めて再び船に乗せ、南を廻つて熊野路の方から倭に攻め入ることにいたしました。

み船は南へ〜と進みました。その間にも、五瀬命のお疵口からは絶えず血が流

れました。命がその血をお洗ひなされた海を、血沼の海と名づけられました。けれども、命の勇氣は少しも挫けません。勇ましくも航海をつゞけました。が、やがて紀の國の男の水門（加太海峡）を過る頃になりますと、だん／＼お身體が衰へて來まして、おん痛ましくもおかくれになりました。命は臨終の時に至るまで、日本平定のお志を挫かず、賊徒退治のことを口にせられてをりました。

お兄上を失はれた天皇のお歎きは申すまでもありません。今は物も申されぬ兄君の遺骸にすがつて、いつまでも御涙にくれましたが、かゝる歎きも皆んな賊人共のするわざだと思ふと、愈々賊徒平定の御志が強くなるばかりでした。そこで、五瀬命を紀の國の竈山といふところに葬り奉り、更に南を廻られて、熊野の浦から上陸なさいました。五瀬命の陵は、今和歌山市の南、海草郡三田村竈山に、官幣中社竈山神社と祀られてあります。

**熊も駈る熊****野の山々**

熊野の浦から上陸された天皇のみ軍は、けはしい山々をふみ踏えい山々や深い谷々が折重つてゐました。おまけに、そこには、天皇に手向ひする悪ものどももたくさんにあるのです。けれども、天皇は少しも驚きはいたしません。たくさんの軍勢を引きつれた天皇さまは、熊野の村をお出でになると、すぐもう深い山の中へ、足を入れなければなりませんでした。

そこには、天にもとゞくかと思はれるやうな杉の大木が生茂つてゐて、その低い山間には、矢のやうに早い谿の流れが、白い泡を立てゝ走つてゐました。人かげもない山中には、道らしい道ありません。さうした中を進んで行きますと、珍らしく聞く人聲に驚いた鳥や獸が、怪しい聲を立てゝ逃げて行くこともありました。

天皇の軍勢は、それでも、油断なく用心しながら、流れに添つて上へ／＼と進んでまゐりました。

突然、深い山の中かち、ガサ／＼／＼、ガサ／＼／＼といふ恐ろしい物音がきこえてまゐりました。

「オヤ、あの物音は何だらう？」

軍勢は怪しんで足を停めました。

「悪者どもが、かくれてゐるのではあるまいか？」

誰れも、さう怪しみました。みんなは拳を握りました。

そこへ篠笹の藪をわけて、鐵砲玉のやうに飛出してきたもの——それは一頭の大熊でした。

「あッ、熊だ、熊だ」

「大きな熊だ、危いッ」

と云つて見てゐるうちに、その熊はどん／＼天皇の軍勢の中にとび込んで來ましたが、別に悪いこともせず、すぐ又山の中へかくれてしまひました。

天皇の軍勢は、そこで暫らく休むことにしました。もう熊のことなどは忘れたやうに口に出すものもありません。

ところが、ふしぎなことに、天皇を初め奉り、そこらの木の根草株に腰を下して休んでゐた兵隊たちは、堪らないほど睡くなつてまゐりました。丁度、どこかに睡魔とでも云ふべき魔物がひそんでゐて、目に見えない絲を此の人たちの上下の臉に吊つて、やは／＼その絲を引いてゐるではないかと思はれるほど、人々の身體はぐつたりし、開いても／＼眼はふさがるのでした。

「おゝ、睡い」

「これはどうしたことであらう」

と云つてゐる中に、そちらでもごろり、こちらでもごろりと打倒れて、他愛なく高いびきを立てゝゐるのでした。

「これ、どうしたのか」

と云つて御覽なされた天皇さまも、とう／＼がまんが出来なくなつて、そこへところ／＼とおやすみになつてしまはれました。

危ないことです。——様子もわからぬ奥山の中で、かうして寝込んでしまはれて若しか賊でも押寄せて來たらどうするつもりでせう。本當に危ないことでした。

しばらくすると、後ろの方から、一人の男が一振りふの立派な劔つるぎを手にしてどんと追ひかけてまゐりました。その男は、やがて天皇たちのおやすみになつてゐらつしやるところへ参りますと、手に持つてゐた劔をぐツと一振り空中へ振りましました。天皇さまが、ぱツちりお目をあかれました。

「お、これは寝過したぞ」

と仰有つてお目を開かれた天皇様は、そこに立つてゐる男を見つけ出し、

「これ、お前はどこのものか」

とお尋ねになりました。すると、その男はニコ／＼しながら、

「あ、お目覚めでございましたか、私は熊野の村からまゐりました」と答へました。

「熊野の村から参つた？ お前は何といふものだ」

「ハイ、熊野の村に住んでをります高倉下と申すものでございます」

「高倉下。して、何の用事があつて参つた」

「ハイ、この寶劔を差上げるためにまゐりました」

「劔を？」

「左様でござります。それについては一つお話し申し上げなくてはならないことがござります……」

と云つて、高倉下は、前夜見た夢のお話をいたしました。それによると、

高倉下は熊野の村に住んでゐる男ですが、前夜の夢に、貴い神様が自分の枕許にお立ちになつて、

「これ高倉下、お前に言ひつけることがある。お前はこれから此の劔を持つて、あの奥山へ向はれた天皇の軍勢に追ひつき、これを奉るやうに致せ。山中の悪い神どものわなにかゝつて、天皇の軍は危ない時に出會つてゐる筈ぢや、ぐづぐづせないで、急げ〜」

とおつしやられて目を覺すと、わが枕邊におかれたのが此の寶劔。恭しく捧げて此處まで来て見ますと、全く神のお告げ通りの此の有様ですと云つて、恭しくその寶劔を捧げました。

天皇はその寶劔をお受けなされ、

「いや、それは大儀であつたぞ」

とおつしやつて、それから、寶劔を手にして何度かビュツ〜と空にお振りなさいました。

すると、ふしぎに兵隊たちがみんな目をさまし、そちらでもこちらでも、

「あゝ、寢過した」

「危ないことをしてをつた」

と云つて起上りました。

兵隊たちは、それから高倉下の話をきき、いづれも危なかつたことと、同時に神の助けの貴いことを感じ、勇んでそこを出立いたしました。

### 八咫鳥に

#### 導かれて

これから奥はいよゝゝ深い山でした。紀の國から大和へ出るには、あの、名高い紀伊や鈴鹿の山脈を踏えなければなりません。そこには高い峯がそばだち、深い谷が横たはつてゐました。空をかける鳥はゐましたが、地を通ふ人はありません。ですから、道といふ道もないのです。天皇のみ軍は、ごちらへどう行つてよいか、たうとう案内がわからなくなりました。

「さて、こまつた」

しばらく其處に立止つてをりますと、俄に高天原の方から大きな聲がきこえてまゐりました。天皇は何であらうかと思召されて、耳をそばだてて聞いて見ますと、それは、天高原にお出でなさる高木の神のお聲で、

「待て、ここから奥の山々には、悪い神々がたくさん居るから、うか／＼入つてはならないぞ。今、八咫鳥を案内に出すであらうから、すべて鳥に導かれるやうにして行かれるがよい」と申すのでした。

天皇はそれをきかれて、大に安心なさいました。

そのとき、ツと一羽の鳥が飛んで来て、天皇の軍勢の先頭に立ちました。その鳥は、「此方へ來なさい」と言はないばかりに、梢から梢へ飛びうつり、天皇の軍の歩くのを待つてゐては、次ぎの梢へ飛びました。

天皇の軍勢は、次ぎ／＼と、八咫鳥のあとについて進みました。その爲めに、深

い山路にまよひもせず、やがて、事なく大和の國に入つて、宇陀といふところまで出ることが出来ました。

### 宇陀の高城に

### 鳴なは張りて

宇陀には宇迦斯といふ兄弟が住んでをり、たくさん手下をもつて、よくないことをしてゐました。そこで天皇様は先づ八咫鳥をお使にしたて、兄弟のものに降参するやうにと勧めました。弟の宇迦斯は、それをきいて、大人しくいふことをききました。

「私には少しも異存がありません。謹んで天皇様の仰せに従ひませう」

と申しました。が、兄の宇迦斯はあくまで心のよくない男でしたから、それをきくと、却つてカン／＼に憤つてしまひました。

「何を生意氣なことをいふ奴だ。私は日本一の勇士であるぞ。降参なんかして堪るものか」

と云つて聽入れず、弓をとつて八咫鳥を射返しました。そこで、天皇の軍と戦さをしようと思つて、自分の手下を呼びあつめました。けれども、手下の者にもそんな悪い者ばかりはあませんので、思つたほどの人数が集りません。いくら愚かな兄宇迦斯にも、これでは天皇の軍に手向ひする丈の勇氣がありません。

兄の宇迦斯は困りました。けれども、まだ降参する心がありません。そこで、一そう悪い考へを起しました。兄宇迦斯は天皇さまに向つて、

「私も、降参いたします」

と云つて偽りを申しました。天皇様は降参するものは討ちません。そこで、宇迦斯のこともお許しなさいました。

その中に、宇迦斯は大急ぎで、新しいお家を建て、そこへ天皇様をお招きして御馳走をいたしたいと申上げました。これは全く宇迦斯の悪いたくらみで、その家の中には、大きな落とし穴が掘つてあり、天井はそのまゝ落して押し殺せるやうに仕

組んでありました。

しかし、そんなことをお知りにならない天皇様は、宇迦斯の家に招かれて行つてそのまゝお家の中へお入りにならうとなさいました。

それを見ると、かねて此のことを知つてゐた弟の宇迦斯がおどろいて天皇様をおとめ申しました。さうして、小さい聲で兄のよくないたくらみをお知らせいたしました。天皇さまは、おどろくと共に卑怯な兄宇迦斯を憎まれました。

そこで天皇さまは、兄の宇迦斯をお呼びなされて、

「お前の家だ、先づお前が先きに入りなさい」

とおつしやいました。

宇迦斯はわざと後にさがつて、

「勿體ないことです。どうぞお先きにお入り下さい」と申上げました。

天皇さまはお笑ひなされて、

「いや、口はどうにでもきけるものぢや。お前には、本當は先きに入ることが出来ないのであらう」

とおつしやいました。

宇迦斯はをかしな言葉だとは思ひましたが、まさか天皇さまが自分の謀りごとを御存知になつてゐるとは思ひませんから、わざと力をこめて、

「どういたしましたして、勿體ないからでござります」

と繰返して申上げました。

天皇さまは、ちツと宇迦斯の不敵な顔を見つめて居られました。

「よし、誠に左様なら、控へるには及ばぬ。許してあげるから先に入るがよい。

さあ、入れ」

とせき立てました。

もう宇迦斯も重ねていやとは云はれません。迷惑さうな顔をしながらも、

「では……………」

と云ひながら、戸口に寄つてもじくしてゐました。天皇は後から、

「さあ、なせ、早く入らぬか」

とせかされました。宇迦斯は致方なく、二足三足と入つたとき、俄に自分の仕かけた天井が、ものすごい音を立て、落ちて來たのに押し潰され、これも自分で掘らせた落とし穴にはまつて、敢ない最後を遂げました。

天皇は、このあはれにも愚かな宇迦斯のさまを御覽なされて、次ぎのやうなお歌をおよみになりました。

宇陀の

宇陀の小高の丘の上で

鳴を取らうと



わなを張つて――

ぢつと待つてゐたら

待つてゐたら

鳴はかゝりもせいで

や！ や！

鯨がかゝり申したぞ

ははは、あの

このお利口ものめ

本たちにおもしろい、愉快な歌ものがたりではありませんか。

## 二二 大和建國

金鷄のか

宇陀の賊徒を退治なされた天皇は、いよ／＼軍を率ゐて、怨みも深

ぶやき

い長髓彦をご征伐にかゝりました。ところが長髓彦は、前に天皇の

軍を追拂つたのだと考へて居りましたから、少しも皇軍を恐れませぬ。盛んにい

さの準備を整へ、たくさんの手下をあつめて、天皇の軍を待つてゐました。

天皇さまは、かたい決心を以て、この強敵を攻め滅さうとなさいました。この時、

みづみづしい、

久米の兵士の

栗の島に

葦が一本生えてゐるよ

こゝろ

根莖だらうが

芽だらうが

うたずにおかうか

おくものか

といふのがあります。これは、憎い賊めを菲にたとへて、御征討の堅い決心をうたはれたものであります。

けれども、長髓彦は本當に天皇にとつては大きな敵でした。彼にはたくさんの手下があつたばかりではありません。土地のやうすもよく知つてをりましたから、たやすく打ち破ることが出来ませんでした。

あるときの戦ひでは、天皇の軍は賊軍のために取りまかれて、もう負けるばかりになつてしまひました。天皇はお持ちなされたお弓を地に杖ついて、賊兵どもを睨

まれたまゝ、

「あゝ残念なことである。何とかして彼等を攻めほろぼすことは出来ぬものか」とお考へになつて居られました。

丁度その時のことでした。

バラ／＼／＼ツといふ軟い羽音が聞えたかと思ふと、一羽の鴉がどこからともなく飛び下りて來た、と思ふと、二三べん空に輪を描いた末、天皇のお持ちになられたお弓の尖にとまりました。

「オヤ？」

これはふしぎなことだと、天皇はじめ部下の兵たちは、一齊に眼をあげて鴉の姿をながめました。

お弓の尖に止つた鴉は、前こゝみに尾をやゝ高くして、賊軍の方を睨んで羽を休めました。見てゐる中に逞しい其の眼から、キラ／＼！ キラ／＼！ と二三べ



金鶏動章『神武天皇和大御平定時の金鶏のめでたい、いはい  
基功軍あのも賜に章動一功よ級七級でま  
あもるあての附下てに應に分身らがての々其りあ  
明治二十三年二月十一日御制定

ん鋭い光りを放ちました。

その眼光は、ふしぎにも恐ろしい光りでした。天皇をとり巻いて集つた味方の人たちの目には何でもなかつたのですが、その光はさきへ行くほど鋭くなつて、押し寄せて来た賊兵の前へ行くと、何萬燭光ともわからない程の強い光になつて輝きわたりました。この強い光にあつた賊兵どもは、とても眼を開いて見てゐることができません。

「あ、あ、あ」

と云つたばかりで、みんな背後を向いたり手を眼にあてたりして、金鶏の光りをふせぎま

した。

目ざとく此のさまをごらんされた天皇さまは、すぐご命令を下されて、

「それ、神のお助けがあるぞ、賊を破るは此の時である、進め、進め！」と申されました。

お指圖がなくても目のあたり此のふしぎを見て勇み立つた味方です。りんくたる勇氣一杯に、

「それ進め！」

とばかり、眼をくらましてゐる賊軍めがけて、なだれの如く攻めかかりました。

皇軍の勇氣に引きかへて、賊兵どもは全くうろたへさわぎました。靈光のあとから神兵です。どうしてこれが防がれませう。

「それ逃げろ」

と云つて、長髓彦もなにもあつたものではありません。いのち辛々どんく逃げ出

してしまひました。

金鷄勳章

のいはれ

かうして天皇の軍は、危いところから切りぬけて、長髓彦の軍を打敗りました。賊軍を全く亡ぼしたのではありませんが、彼等の元氣は全く無くなるほどに痛手をうけたのであります。

これは後になつてからのお話であります。明治天皇様は此の戦ひの折の、金の鷄の偉大な働きに御感動なされ、その像を彫りつけた金鷄勳章をおつくりになつて以來、戦ひに出て抜群の手柄をたてた軍人に賜はることにいたしました。今日幾十萬とある軍人の中で、この金鷄勳章を胸高く輝かしてゐる方々は、いづれも生命を的の戦地に出て、群を抜く勇ましい働きをした軍人なのであります。

大和

平定

さて、長髓彦の軍勢は、皇軍の神威にうたれてもろい敗けいくさをしてしまひました。あくまで手下をあつめて皇軍に手向はうとしました。

長髓彦のかうした頑迷に一ばんこまつたのは饒速日命であります。

前にもお話したやうに、長髓彦は自分の奉じてゐる饒速日命を、唯だ一人の神であると思ひつけてゐましたから、皇軍を皇軍だとはおもひません。たゞ饒速日命に忠義をつくしさへすれば、それが何よりのよいことだと考へて居りました。

饒速日の命は、これをおはれに思はれました。天皇さまが、本當に高天原の神の御末であることは、天皇の軍勢が用ゐてゐる弓や矢を見てもすぐわかることでしたから、いく度も其のことを云つて、皇軍に降参するやうにと話してきかせました。けれども、たゞ一途に自分を信じてゐた長髓彦は、

「いゝえ、いけません。あなたをおいて他に神様はない筈です。にせ者の神様に

「何で降参出来るのですか」

と云つて、どうしても聽容れません。金鵝の靈光に打たれて逃戻つたときにも、命は長髓彦をたしなめて、

「ごうぢや、これでも汝は私のいふことをきかないか」

と申しましたが、あくまでおろかな彼は、

「戦さはいくさ、今日は負けても此の次ぎには勝つて見せます」

と云つて、相變らずいふことをきません。

「あゝ、こまつたものだ」

と云つて、命は大きなため息をつかれました。

しかし、命も、いつまでかうしておくわけにはいきません。いろ／＼とお考へになられた末、

「この上は致方がない。かわいさうではあるが、彼を誅して降服する外に方法は

ない」

とご決心になりました。

そこで、お子様の可美眞手命ともご相談いたしました。たうとう長髓彦を誅せられ、その上で、天皇の軍門に降られました。

度量の大きい天皇さまは、決していつまでもわるさを憎まれません。降参するものはすべてを許し、家來の中に入れておかわいがりになりました。

かうして大和一帶の地は初めて平定され、人々は有りがたい皇澤に浴することになつたのであります。私どもは、かうした苦辛の後に建てられた國の礎を偲び、その有りがたい大御心を仰がねばなりません。

大和建國

大和はおだやかにになりました。げに「雲にそびゆる高千穂の、高ねおろしに」は、草木の末にいたるまで、なびかぬものもなくなりしました。

思へば長い年月を御征討の旅にお過しあそばされた天皇様の大業、それが遂に出来上つたのであります。

祝へ人々。

山も川も、天地をあげて、喜びの波にひたされる時が来ました。

天皇は、ぐるりと美しい青垣山にかこまれた大和を國見して、

「かの畝傍山の東南、橿原の地を觀れば、蓋し國の塊區ならむ。みやこつくるべし。」と仰せられ、そこに帝都をお定めになり、日本第一代の皇位にお即きなされることになりました。

橿原の都はいとおごそかに造られました。百官を従へさせられた天皇さまは、天地の神々を祀り、四方の國々にのりごととして、わが大日本の皇基をお樹てになりました。ですから、正しくいへば此の時までは、天皇と申上げないのですが、これまでも私は天皇様と申上げてまゐりました。

これが辛酉の年正月一日のことで、我が紀元元年ですから、今から二千五百九十餘年前。その日は今日の暦日になほしますと二月十一日、年どしに祝ひ奉る紀元節こそ、このよき日を壽ぎまつる大祝日なのであります。又、この日を以て我が日本——私どもの今住む祖國が建てられたものですから、紀元節は直ちに日本の建國祭を営むわけなのです。何とお目出度くもうれしい日ではありませんか。

神武天皇様は、御位におつきなされてから七十六年目、紀元七十六年の四月三日（今日）に、おん年百二十七歳の高齡を以てお崩れになりました。その御陵は畝傍の北、白檮しげる丘の上にございます。毎年四月三日の神武天皇祭は、この日をいつきまつる祭日なのであります。

昭和十一年三月二十五日印刷  
昭和十一年四月五日發行

趣味の國史物語（建國篇）  
定價一圓五拾錢

著者 皇國史研究會

發行者 東京市小石川區雜司谷町一〇〇  
織壁憲

印刷者 東京市澁橋區柏木五丁目一七四  
澤敬二郎

發行所 東京市小石川區雜司谷町一〇〇  
東京學友社

發賣所 東京市神田區神保町一ノ一  
株式會社 上田屋書店  
振替 東京三〇八六番

不許複製

著作權所有

終